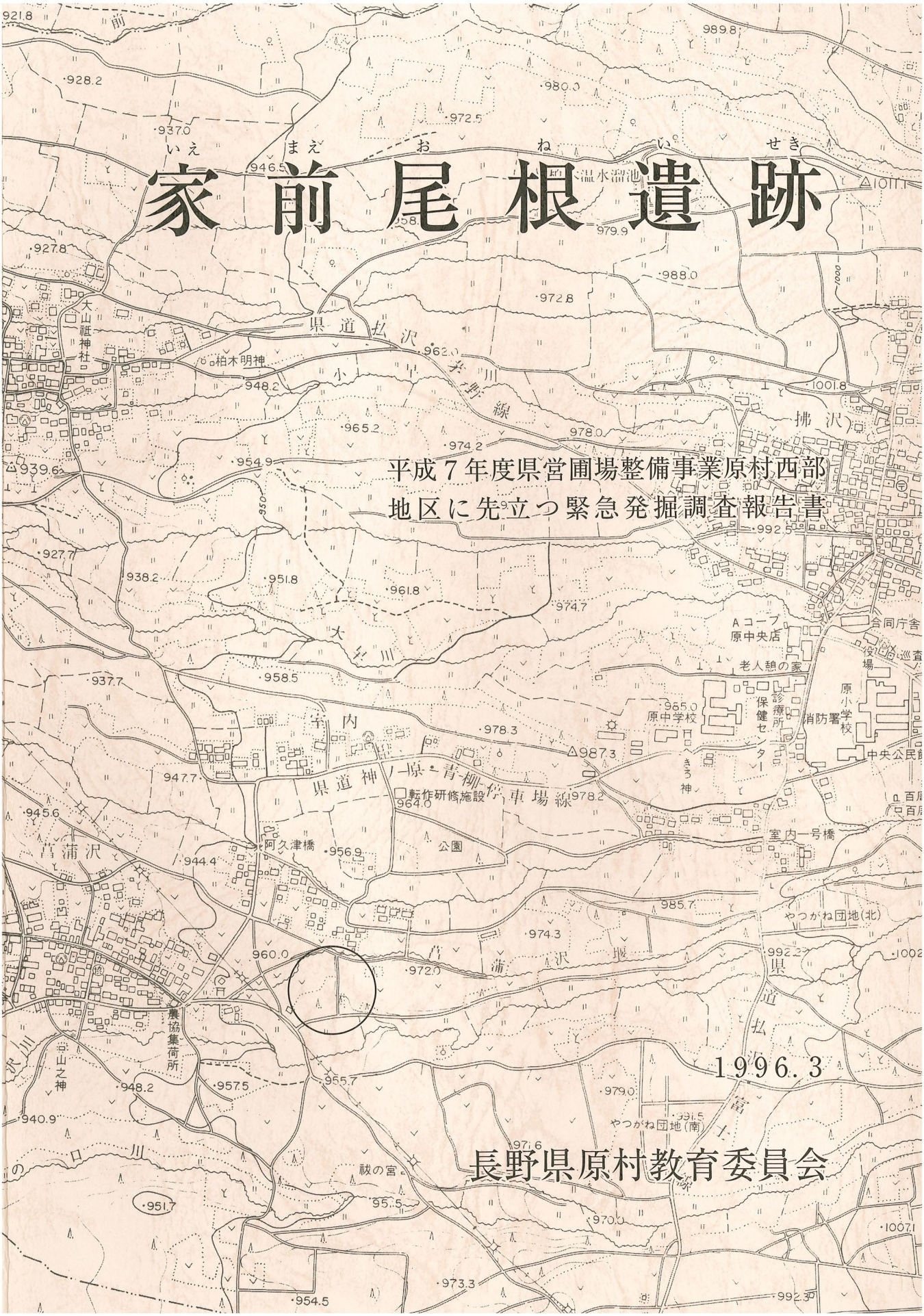


家前尾根遺跡

いえまえおねいせき

平成7年度県営圃場整備事業原村西部
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1996.3

長野県原村教育委員会

家前尾根遺跡

平成７年度県営圃場整備事業原村西部
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1996.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の１　○印が家前尾根遺跡

序

八ヶ岳西麓に位置する原村では、村の基幹産業たる農業の合理化と生産性向上が求められ、これにともなう県営圃場整備事業が大規模に進められております。また八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的に著名であり、古くから注目を集めて来ました。

今回報告する、家前尾根遺跡は「平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区」内に存在しており、諏訪地方事務所の委託と国・県からの補助金の交付を受けた原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。

縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかりました。検出した遺構は縄文時代前期の竪穴住居址８軒、中期の竪穴住居址２軒、小竪穴44基、平安時代後期の竪穴住居址６軒を調査し、それらに伴う遺物が出土しております。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、室内区及び実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解とご協力、長野県教育委員会のご指導をはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、炎天下でご苦労された作業員の皆様の力により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげます。

平成８年３月

原村教育委員会
教育長　大舘　　宏

例　　言

1　本報告は「平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村室内に所在する家前尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成７年５月１日から９月29日にかけて実施した。整理作業は、平成８年１月４日から３月25日まで行った。

3　遺構・遺物の実測とトレース、写真撮影は平出一治・平林とし美・石川美樹が行った。遺構写真は調査担当者が撮影した。

4　執筆は、平出が行った。

5　本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
　なお、本調査関係の資料には、56の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、丸山敞一郎・小平和夫・原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　　次

例　言
目　次
図版・表目次
Ⅰ　発掘調査の経過……1
　1　発掘調査に至る経過……1
　2　調査組織……2
　3　発掘調査の経過……2
Ⅱ　遺跡の位置と環境……4
　1　遺跡の位置と環境……4
　2　遺跡の歴史的環境……5
Ⅲ　調査方法……9
　1　調査区の設定と調査方法……9
　2　土層……9
　3　調査の概要……12
Ⅳ　遺構と遺物……14
　1　縄文時代の遺構と遺物……14
　2　平安時代の遺構と遺物……45
　3　近世の遺構……56
Ⅴ　まとめ……56

引用参考文献
報告書抄録

図　版　目　次

第1図　原村域の地形断面模式図（宮川―家前尾根―赤岳ライン）……1
第2図　家前尾根遺跡の位置と付近の遺跡……6
第3図　発掘調査区域図・地形図……10
第4図　グリッド配置図……11
第5図　遺構配置図……13

第６図　第６号竪穴住居址実測図……15
第７図　第７号竪穴住居址実測図……16
第８図　第８・16号竪穴住居址、小竪穴33実測図……17
第９図　第３・６・８・13号竪穴住居址、小竪穴10出土土器実測図・拓影……19
第10図　第９号竪穴住居址、小竪穴19実測図……21
第11図　第13号竪穴住居址、小竪穴37実測図……22
第12図　第14号竪穴住居址実測図……23
第13図　第15号竪穴住居址実測図……24
第14図　第３号竪穴住居址、小竪穴１実測図……25
第15図　第５号竪穴住居址実測図……26
第16図　小竪穴２～９・11・16・17実測図……28
第17図　小竪穴10実測図……31
第18図　小竪穴12～15・18・20・22～27実測図……33
第19図　小竪穴21・28～32・34・35・38・39実測図……38
第20図　遺構外出土土器拓影その１……42
第21図　遺構外出土土器拓影その２……43
第22図　遺構外出土石器・石製品実測図……44
第23図　第１号竪穴住居址実測図……45
第24図　第１・２号竪穴住居址出土土器実測図……46
第25図　第２号竪穴住居址実測図……48
第26図　第４号竪穴住居址実測図……49
第27図　第10号竪穴住居址出土土器実測図……50
第28図　第10号竪穴住居址実測図……51
第29図　第11号竪穴住居址、小竪穴36・40～44実測図……53
第30図　第11・12号竪穴住居址出土土器実測図……55

表　目　次

表１　家前尾根遺跡と付近の遺跡一覧……7
表２　時代別竪穴住居址……14
表３　小竪穴10出土黒曜石一覧表……58

Ⅰ　発掘調査の経過

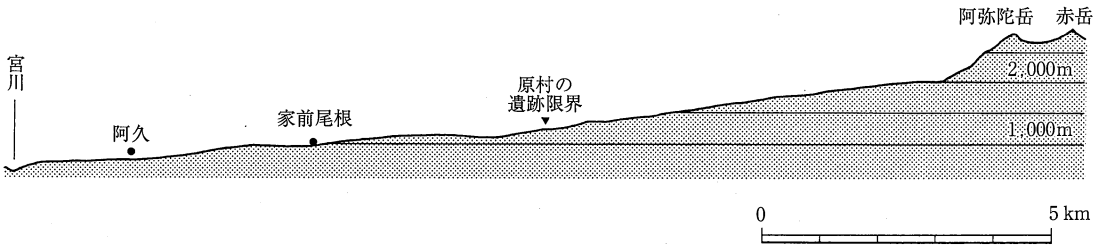
1　発掘調査に至る経過

農村地域はどこでも同じであろうが、後継者がいないことから高齢化は進むばかりである。だからと云って労力が少なくなることはなく、機械化を望む声は強まるばかりである。その機械力を増すためには、まず農地と農道の整備が必要となってくる。それが原村における圃場整備事業である。

原村の柏木・菖蒲沢・室内の３地区に跨って計画されている「県営圃場整備事業原村西部地区」内には、国の史跡である阿久遺跡をはじめ大小様々な遺跡が点在し、当地方において最も遺跡が密集している地域である。その保護については前々から原村役場農林課と協議を続けてきたが、平成４年９月８日に長野県教育委員会の「県営圃場整備事業原村西部地区にかかる埋蔵文化財の保護について」で具体的な協議がはじめられた。しかし、遺跡の性格および範囲が不明なものが多く、それらをできる限り明らかにしていくという大きな課題が残された。しかし、原村教育委員会の調査体制では、平成５年度に１遺跡の範囲確認調査を実施するのが目一杯のことで、問題は山積みされたままであった。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の４者であった。

その後も協議と打合せを行なうが、遺跡の性格が不明瞭なこともあり適切な結論を導き出すことはできないままであり、すこしでも適切な資料を得るため、平成５年６月26日に長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、地元委員会、原村教育委員会の５者で予定地内の踏査を行なっている。

平成７年度における具体的な保護協議がはじめられたことにより、村教育委員会では再度踏査を行なったが、満足のいく資料を得ることはできないままであった。その数少ない資料をもとに平成６年６月20日に原村役場および現地で行なわれた、長野県教育委員会の「平成７年度県営圃



第１図　原村域の地形断面模式図（宮川―家前尾根―赤岳ライン）

場整備事業原村西部地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。家前尾根遺跡と中尾根遺跡がその対象となった。遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、はじめにも記したように農業者の強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き。緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の４者であった。

原村教育委員会は、国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、平成７年５月１日から９月29日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2　調査組織

家前尾根遺跡発掘調査団名簿

団　　長	平林　太尾（原村教育委員会教育長　～平成７年７月22日）				
	大舘　　宏（原村教育委員会教育長　平成７年７月23日～）				
調査担当者	平出　一治				
調　査　員	平林とし美	石川　美樹			
調査参加者	発掘作業	清水　正進	小松　　弘	坂本ちづる	宮坂とし子
	五味八代江	平林　途雄	西沢　寛人	清水　健郎	中村きみゑ
	小林　ミサ	清水としみ	清水みち子	鎌倉きふみ	日達今朝江
	日達　典子	平林けさ江	津金喜美子	進藤　郁代	小池　芳久
	吉川　幸子	家中　光恵			
	整理作業	津金喜美子	坂本ちづる	進藤　郁代	（順不同）

事　務　局	原村教育委員会事務局	平林今朝二（教育次長）	大口美代子（庶務係長）		
	宮坂道彦（主任）	伊藤　佳江	平出　一治	平林とし美	石川　美樹

3　発掘調査の経過

平成７年５月１日　発掘準備をはじめる。

17日　機材の搬入を行なう。

22日　グリッド設定をはじめる。

日　範囲確認を目的としたトレンチの掘削を重機ではじめる。

25日　教育長あいさつの後、範囲確認を目的としたグリッド調査と、トレンチ内の調査を人力ではじめる。

６月６日　遺跡の範囲がほぼ明らかになり、重機で表土剥ぎをはじめる。

15日　遺構の検出作業を人力ではじめ、縄文時代と平安時代の竪穴住居址の埋没を確認する。なお、住居址の帰属について縄文時代は（縄）、平安時代は（平）と標記する。

16日　第３号住居址（縄）・第２号住居址（平）の検出写真撮影を行う。

20日　村道の法面で検出した第４号・第５号住居址（縄）の断面調査と写真撮影を行う。

21日　第２号住居址（平）の精査をはじめる。

22日　第４号住居址（縄）の検出写真撮影後精査をはじめる。

25日　第３号住居址（縄）の平面実測を行う。

26日　第３号住居址（縄）の精査をはじめる。

27日　小竪穴１～３の検出状況写真撮影を行う。

28日　第７・８号住居址（縄）の検出写真撮影後精査をはじめる。第２号住居址（縄）の埋土の観察と土層実測を行う。

30日　第２号住居址（平）の遺物・炭化材出土状態写真撮影後平面実測を行う。第３号住居址（縄）全景写真撮影後精査をはじめる。

７月10日　第１号住居址（平）、第９号住居址（縄）の検出写真撮影後精査をはじめる。

11日　小竪穴の精査をはじめる。

18日　第８・９住居址（縄）の埋土の観察と土層実測を行う。

25日　第３・７号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

26日　小竪穴４～８の検出写真撮影を行う。

27日　第10号住居址（平）の埋土の観察と土層実測を行う。

28日　小竪穴９・10・17・18の検出写真撮影を行う。第１号住居址（平）の平面実測をはじめる。

31日　小竪穴19の検出写真、第９号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

８月１日　小竪穴20の検出写真、第１号・第２号住居址（平）の全景写真撮影を行う。・平面実測が終了した住居址のカマド精査を順次はじめる。

２日　小竪穴21の検出写真、第10号住居址（平）の炭化物出土状態写真撮影を行う。

３日　小竪穴15・16の検出写真、第６号・第８号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

４日　第13号住居址（縄）の検出、第２号住居址（平）カマドの写真撮影を行う。

７日　小竪穴13・14の検出写真、小竪穴21の土層写真、第10号住居址（平）の遺物出土状態写真、第１号・第２号住居址（平）の全景写真撮影を行う。第２号住居址カマドの精査、第10号住居址の遺物取り上げをはじめる。

８日　第６～９号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

9日　第12号住居址（平）の検出写真撮影後精査、第10号住居址（平）の平面実測をはじめる。

10日　小竪穴23～27の検出写真撮影を行う。

11日　黒曜石の原石が出土した小竪穴10の埋土観察を行う。

17日　第13号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

18日　第10号住居址（平）の全景写真、第13号住居址（平）カマドの全景写真撮影を行う。カマドの精査、小竪穴の平面実測をはじめる。
並行して調査を進めていた中尾根遺跡に主力が移るため、片付けと機材の運搬をはじめる。

21日　小竪穴10黒曜石原石出土状態の写真撮影を行う。

22日　第15号住居址の検出写真、第14号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

24日　第16号住居址の検出写真、第15号住居址（縄）・第10号住居址（平）の全景写真撮影を行う。第9号住居址（縄）の平面実測を行う。

29日　第10号住居址（平）カマドの写真撮影を行う。

30日　第11・12号住居址（平）の遺物・礫出土状態写真、第16号住居址（縄）の全景写真撮影を行う。

9月1日　調査範囲全景写真撮影を行う。

4日　第4・5・7・8・13・14・15・16号住居址（縄・平）の平面実測を行う。

7日　第11号住居址（平）カマドの写真撮影を行う。

13日　第11号住居址（平）の全景写真撮影後、カマドの精査をはじめる。

20日　第12号住居址（平）の全景写真撮影後、カマドの精査をはじめる。

29日　中尾根遺跡に機材を運び調査を終了する。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と自然環境

家前尾根遺跡（原村遺跡番号56）は、室内区の南方にあたる長野県諏訪郡原村11,424番地付近に位置する。標高は970m前後を測る。

このあたりは八ケ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである菖蒲沢川と阿久川にはさまれた尾根上から緩やかな南斜面が遺跡である。南を流れる菖蒲沢川までは約70mを計り、その比高差は5m前後で、沢までの平坦部は水田となっている。北の阿久川側は古くから宅地化されている。阿久川との比高差は6m前後を計る。

発見した縄文時代前期の住居址は緩やかな南斜面に集中していたが、道路（昭和51年に改良事業が実施された村道）および農道（前記の村道から耕地への取付け道）によって破壊されているものが多かったし、尾根上の広い耕作地は、人為的に平坦化された範囲も広く、地山のローム層まで削平されたところも広範囲にみられた。また、耕作による深い畝もみられ、その保存状態は良くなかった。

地目は普通畑であるが、用地外は山林と共同墓地となっている。遺跡の南側一帯は水田であり、平安時代の住居址は水田造成で破壊されていることが考えられる状態であった。なお、水田が造成された時期は古いようである。

地味は、自然の礫はみられず極めて良いが、黒土の堆積は厚いところと前記したようにすでに削平されたことにより薄くなっているところがある。

当地方において遺跡が密集する地域で、付近には第１図と表１に示したように大小様々な遺跡が点在している。東方は、縄文時代中期曽利式の完形台付土器が発見されたことで著名な久保地尾根遺跡（原村遺跡番号57）があり接している。北の阿久川の対岸には中尾根遺跡（同55）が、また、西方には原村屈指の大遺跡の一つである山の神遺跡（同50）と、中央自動車道の建設に先立つ発掘調査で縄文時代前期と中期、平安時代後期の集落跡が発見調査された大石遺跡（同49）がみられる。その先は、フォッサマグナの西縁である糸魚川 ― 静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

なお、原村における遺跡の高度限界は1200m前後のラインである。

2　遺跡の歴史的環境

本遺跡の発見はそう古いことではなく、昭和48年から諏訪清陵高校地歴部考古班が「原村の考古学的調査」と題して実施した分布調査の折に、縄文時代中期曽利Ｖ式の土器破片と土師器を採集し「上菖蒲沢遺跡」と呼称したことにはじまる。その報告には次のように記載されている。長くなるが全文を紹介してみたい。

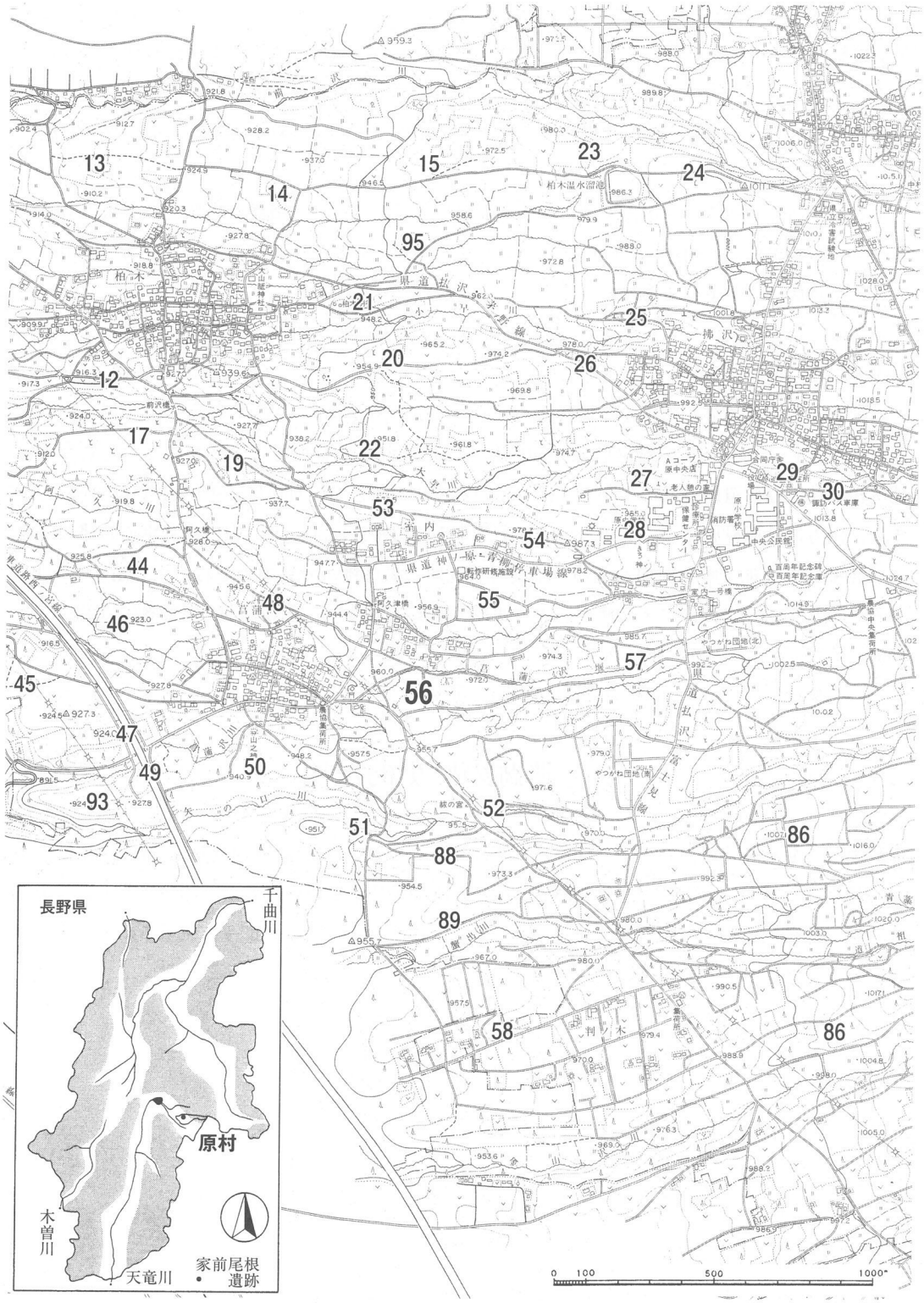
上　菖　蒲　沢　遺　跡

△　地勢・環境

土器

本遺跡は菖蒲沢堰のある尾根の南側に位置する。その堰の両側は針葉樹林があり耕地の多くは野菜畑に利用されている。

付近は川もあり、日当りも良好である。



第２図　家前尾根遺跡の位置と付近の遺跡

表1　家前尾根遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見　◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	家裏	○				◎						◎			昭和59年度発掘調査
2	大久保前											○			昭和54年消滅
3	向尾根	○	○			○									昭和54年度発掘調査
4	横道下					○						○	○		昭和54年度発掘調査
9	比丘尼原					○						○			
10	柏木南	○				◎									昭和50年度発掘調査
11	阿久		○	○	◎	◎	○					◎			昭和50～54・平成5年度発掘調査
12	前沢					◎						○			昭和55・61年度発掘調査
13	長峰			○	○	◎	○		○			◎		○	平成3年度発掘調査　消滅
14	裏長峰	○		○		○						◎			平成3年度発掘調査　消滅
15	程久保			○		◎	○					◎		○	平成4・5年度発掘調査　消滅
17	臼ヶ原			○		○						○			昭和53年度発掘調査
18	前尾根西					○									
19	南平					○									
20	前尾根					◎	◎					○		○	昭和44・52～54・59年度発掘調査
21	上居沢尾根					◎	○							○	平成4年度発掘調査
22	清水					○									
23	恩膳西	○			◎	○	○					◎			昭和62・平成5・6年度発掘調査
24	恩膳			○		◎	◎					○			昭和62年度詳細分布調査
25	裏尾根					○									
26	家下					○						○			昭和59年度発掘調査
27	闘盧沢					○						○			昭和62年度発掘調査
28	宮平					○						○	○		
42	居沢尾根			○		◎	○					◎			昭和50～53・56・平成6年度発掘調査
43	中阿久					○						○			昭和51年度発掘調査
44	原山					○						○			昭和51年一部破壊
45	広原日向	○				○	○					○			昭和58年度発掘調査
46	宿尻	○				◎						◎			平成5・6年度発掘調査　消滅
47	ヲシキ			○	○	○						◎			昭和51年度発掘調査
48	楡の木					○									昭和53年一部破壊
49	大石	○		○	◎	◎	○					◎		○	昭和50・平成4・5年度発掘調査
50	山の神					◎	○					○			昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原					○	◎								昭和63・平成元年度発掘調査
52	水掛平					○						○			
53	雁頭沢					◎						○		○	昭和54・57・63・平成4・5年度発掘調査
54	宮ノ下			○		○						○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根				◎	◎	○					◎		○	平成7年度発掘調査
56	**家前尾根**			○	◎	◎	○					◎		○	**昭和51年一部破壊、平成7年度発掘調査**
57	久保地尾根					◎									昭和51年一部破壊、平成6年度発掘調査
58	判の木											○			
87	下原山南			○		◎						○			昭和63・平成元年度発掘調査
88	下原山北			○		◎	○					○			昭和63・平成元年度発掘調査
93	大石西			○	○							○			平成3年度発掘調査
95	土井平											◎			平成4年度発掘調査　消滅

△　遺物

土器

本遺跡には土師器が多く、中でも赤褐色で、焼きの硬い物が目につく、また、それらの中には、ろくろ痕がはっきり残っている物もある。

土師器以外の土器としては、縄文中期のものが数片見られる。その中で最大のものは長さ約10cmで、所々に浅く沈線が入れられている。縄文中期曽利Ⅴ式の土器であろう。

石器

本遺跡では石器は採集されなかった。

△　まとめ

立地条件の良さにもかかわらず、発見遺物は少ない。縄文中期曽利Ⅴ期の土器と、土師器片のみ時代が確認されている。小さな規模の遺跡である。

その後、昭和51年には道路改良工事のため、発掘調査がされないまま遺跡の南側は破壊されている。その地層の断面には住居址と考えられる落込み２～３箇所と、縄文時代中期の曽利Ⅴ式土器の破片、平安時代の土師器の破片などが発見されている。

昭和54年度に長野県教育委員会が実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査や、村誌編纂に伴って実施した分布調査でも、土師器の破片を採集し、村誌上巻で「山林として残されている範囲も広く、今もって遺物の散布範囲を明確にできない状態である。土師器の発見数が比較的多い点で平安時代の住居址の存在が推測される。また、地層の断面では時期こそ確認できなかったが、住居址と考えられる落込みが認められていることなどから良好な集落遺跡と考えられる。」と集落遺跡である可能性を述べている。

遺跡名について、前記した諏訪清陵高校地歴部考古班では「上菖蒲沢遺跡」と呼称していたが、昭和54年度に実施された「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折に、本遺跡名を「上菖蒲沢遺跡」から「家前尾根遺跡」に改めて今日に至っている。

Ⅲ　調査方法

1　調査区の設定と調査の方法

発掘調査の対象は、平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区にかかる遺跡全域におよぶがその範囲は広い（第２図）。

発掘に先だち、東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに２×２ｍの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からＡ～Ｙのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた（第４図）。

準備期間中に数回におよぶ踏査を行ない調査方法を検討したが、採集した遺物は少なく遺跡の範囲を明確にできないまま、発掘調査を進めて行くことになったため、まずグリッド発掘と重機を使用したトレンチ調査を併用し、範囲を確定することからはじめた。

トレンチは東西方向、南北方向ともグリッドの軸に合わせた。トレンチの幅は重機のバケット幅である1.2～1.3mである。その調査は原則として層位別にローム層の上面まで行なっている。

黒色土中において遺構の埋没を確認することがなかったため、重機によってローム層の上面までの土を取り除いている。その後に遺構の検出作業を行ない、順次精査を実施している。

発見した遺物は、基本的にグリッド別・層位別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別にとり上げた。

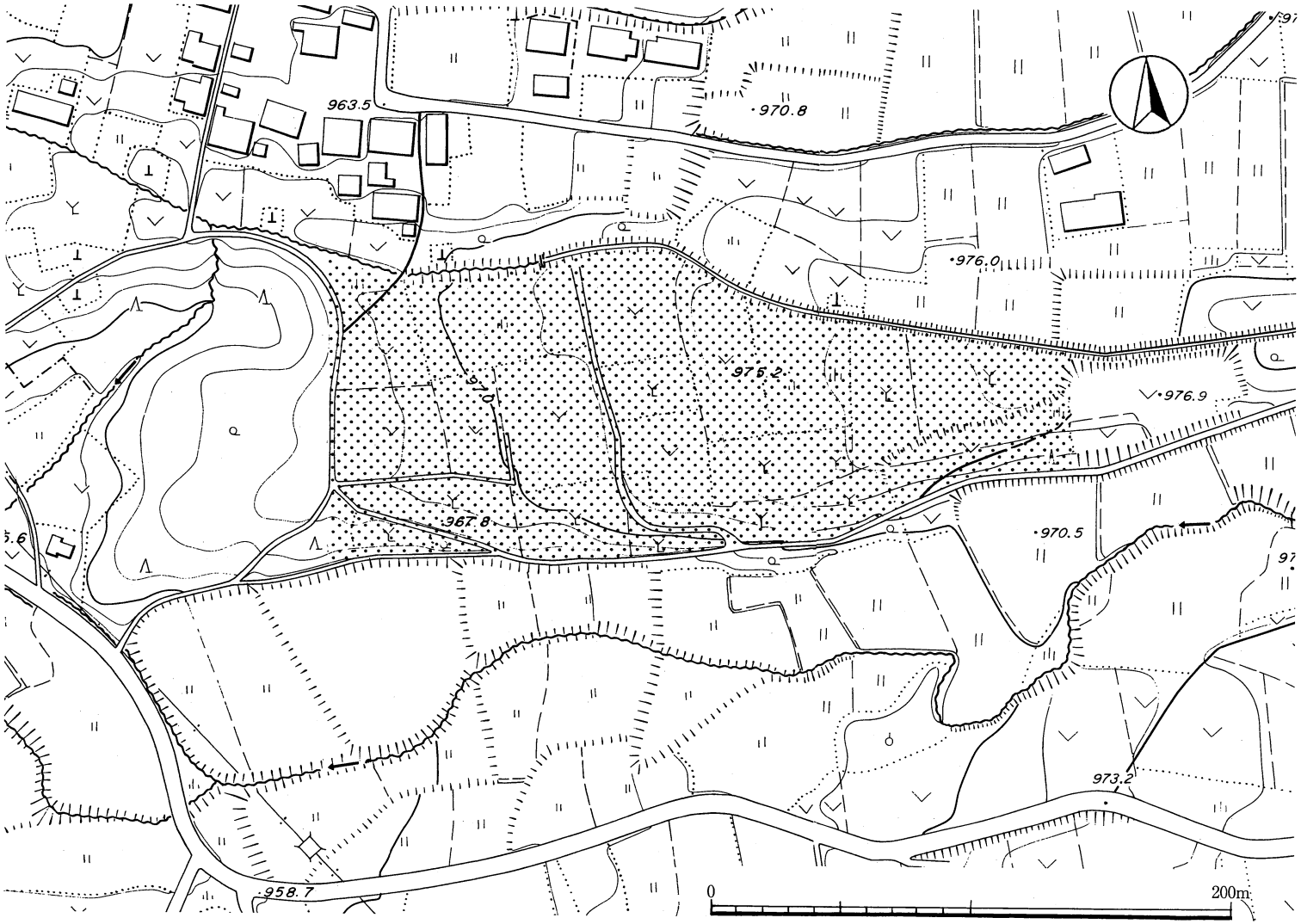
測量は、予め設定した２ｍ四方のグリッドを基準とするやり方方式による。

2　土層

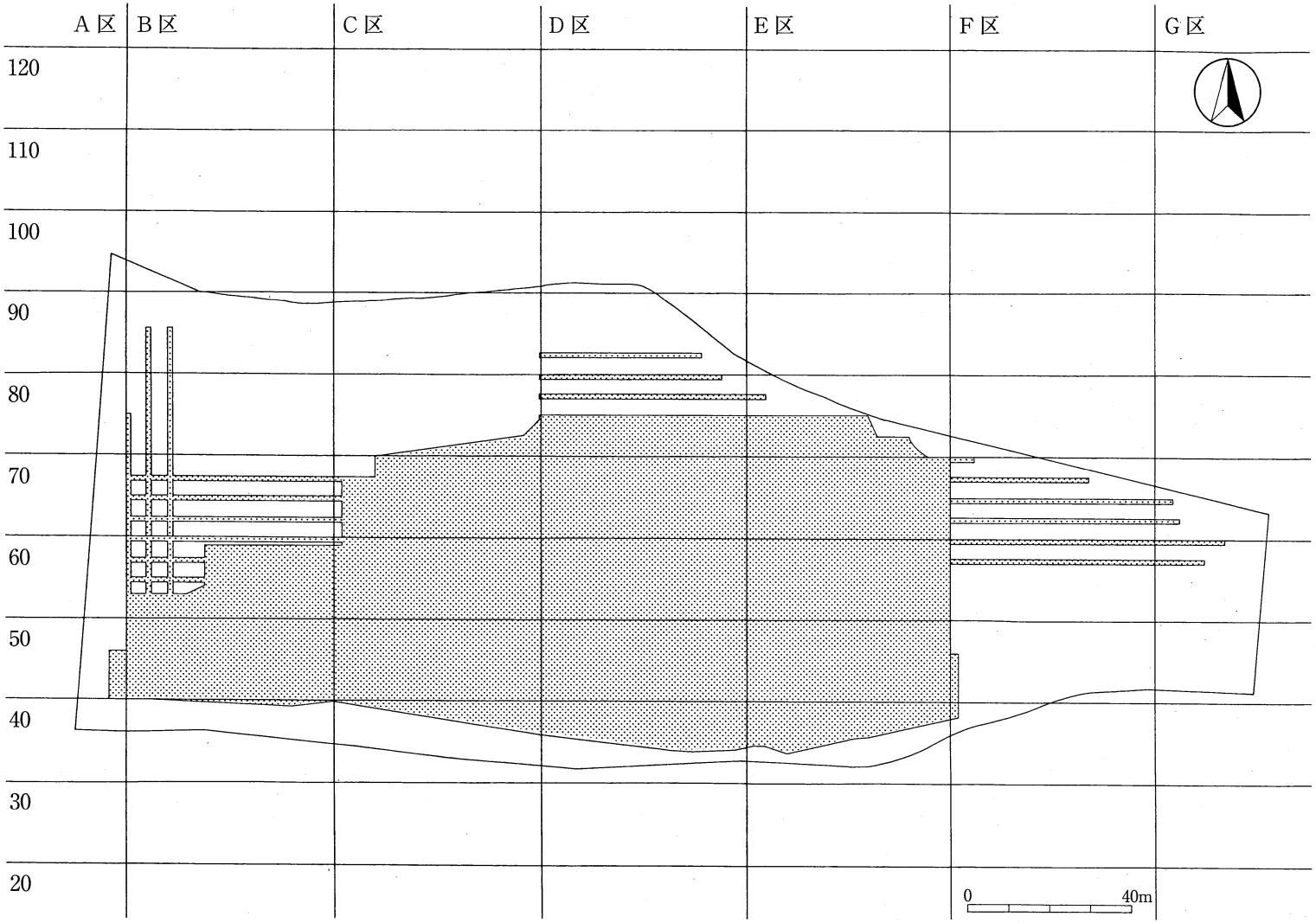
グリッドとトレンチの壁面の観察結果は次の通りである。

調査では、尾根上から緩やかな南斜面で住居址を発見しているが、尾根上と緩やかな南斜面では層序に違いがみられた。尾根上は比較的安定した層序であったが、斜面は不安定な上に流出していることが考えられる状態であった。

尾根上には、地山のローム層までが深い箇所もみられるが、耕地を平坦化するため、すでに重機によってローム層を削平している箇所が広範囲にみられあまり良い状態ではなかった。また、畑の堺辺りも長年の耕作で土の移動が見られ平坦化されている。それは同じ畑地の中でも自然地



第３図　発掘調査区域図・地形図（１：2,500）



第4図　グリッド配置図（1：1,600）

形の高い方の黒色土は薄いが、低い所は黒色土が厚くなる傾向にあった。

おおまかな観察結果を記しておきたい。

第Ⅰ層　黒褐色土層　　表土層・畑の耕作土で畑によって厚さはまちまちで８～24cmを計るが、10～15cmの所が多い。CY－73グリッド付近には客土がみられた。

第Ⅱ層　黒褐色土層　　第Ⅰ層よりしまっている。10～30cmを計り、ローム層まで深い箇所はこの層が厚く堆積していた。基本的には南斜面も同様であるが、土の流出のためか厚くなる上にロームの細粒が包含されている。したがってそれはローム細粒含黒褐色土層となる。

第Ⅲ層　黄褐色土層　　しまり堅さは第Ⅱ層と同じで、５～26cmを計る。やはり南斜面ではロームブロックを包含している。そのロームの量が多いため色彩は黄色土となる。

第Ⅳ層　褐色土層　　いわゆるローム漸移層である。

第Ⅴ層　ソフトローム層

3　調査の概要

発掘調査は、平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立つもので、13,800.0㎡の平面発掘を層位別に実施した（第４図）。

検出した竪穴住居址は16軒で、縄文時代と平安時代に分けることができる。縄文時代は前期の竪穴住居址が８軒、中期の竪穴住居址が２軒、平安時代は後期の竪穴住居址が６軒である。

小竪穴は44基あるが、時期が明らかにできる遺物を伴出したものは少なく帰属時代は不明である。性格が判明したものも少ない。本来なら「時代不詳の小竪穴」で記載すべきであるが、便宜的に縄文時代で一括してある。また、近世の墓壙１基を検出したが対象外とした。当初考えていたよりも遺構の分布は希薄の上に極めて広範囲におよんでいる（第５図）

発見した遺構と遺物は次の通りである。

縄文時代

前期・中期・後期の土器破片と石器

前期竪穴住居址　８軒

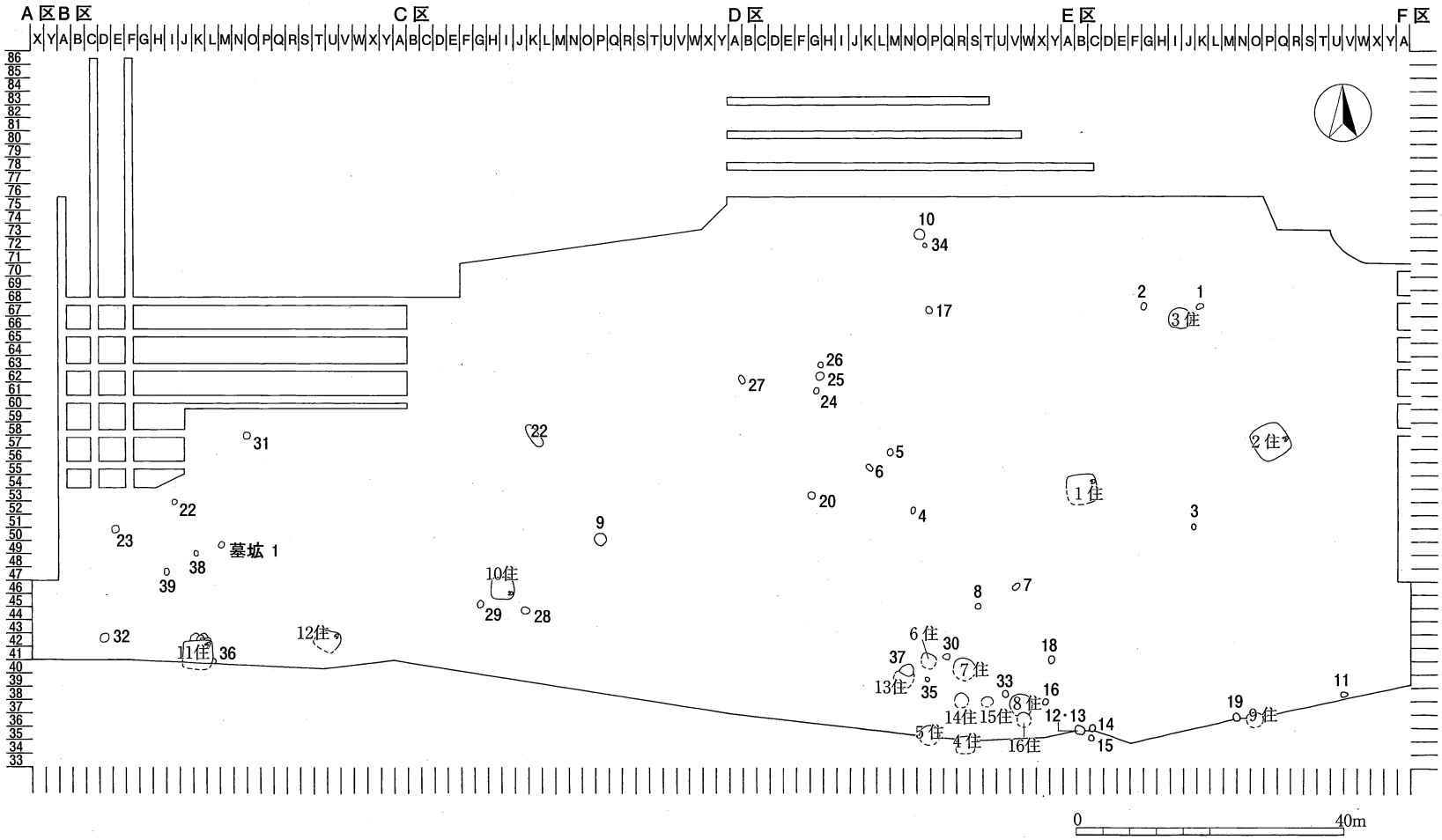
中期竪穴住居址　２軒

小竪穴　　44基（遺物が伴出しない小竪穴も便宜上ここに含めた。）

平安時代

後期土師器・須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石製品、炭化種子

後期竪穴住居址　６軒



第５図　遺構配置図（１：1,000）

住居址　１住
小竪穴　1

近世・現代

墓壙　　1基（対象外とした。）

縄文時代の竪穴住居址は10軒であるが、前期の第6～9号・第13～16号竪穴住居址7軒は尾根南斜面に集中し、第9号竪穴住居址がやや離れている。竪穴住居址は欠損範囲が多いうえに遺物の出土が少ないこともあり詳しいことはわからない。第8号と第16号竪穴住居址は重複しており少なくとも2時期にわたる集落が営まれていたようである。また、第5号竪穴住居址は前期最末ないしは中期初頭に帰属するもので、立地条件に若干の違いがある。

平安時代後期の竪穴住居址は、緩やかな南斜面から尾根上に展開しており当地方における典型的な集落址である。竪穴住居址間は他遺跡に比べやや離れていた。

表2　時代別竪穴住居址

縄文時代	平安時代
前期　第6号、第7号、第8号、第9号、第13号、第14号、第15号、第16号 中期　第3号、第5号	第1号、第2号、第4号、第10号、第11号、第12号

Ⅳ　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、第5図に示したように前期の竪穴住居址8軒と中期の竪穴住居址2軒、小竪穴44基である。出土した遺物は土器と石器があるが当地方としては少ないようである。なお文中のカッコ付けの数値は現存範囲を示している。

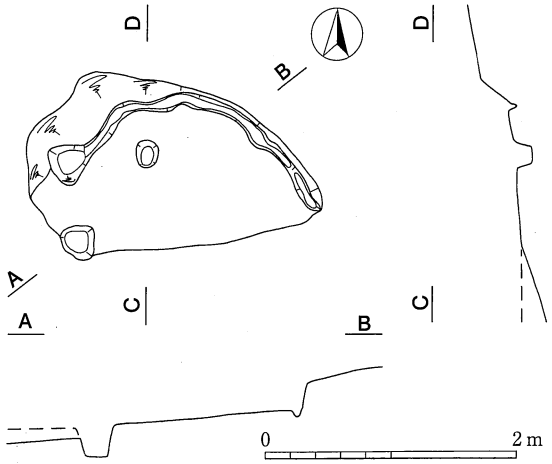
（1）縄文前期の竪穴住居址

第6号竪穴住居址（第5・6・9図、写真18）

南斜面のDO－40・41、DP－40・41の4グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址と思われる。この辺りは傾斜が強く南側の半分以上がすでに流失していた。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際は20cm程を計る埋土も傾斜が強いため住居中程では無くなるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

黒色土からローム層中に構築された住居址である。傾斜が強いためローム層中に構築された北側の僅かな範囲が遺存しただけであり詳しいことはわからない。壁・床とも南側の半分以上はす



第６図　第６号竪穴住居址実測図（１：60）

でに流失していたが、竪穴の大きさは長軸（242）cm、短軸（137）cmである。東壁の立ち上がりは普通であるが、北西壁は崩落のためだらだらで不安定である。北壁の高さは20cmである。残存する床面はやや西に傾斜し、部分的にタタキ床も認められたが総体的には軟弱で良くない。壁直下に幅は７～13cm、深さ２～10cmの周溝がみられるが西壁直下は浅いピット状になる。柱穴状のピットを検出したが、深さ６cm、17cmと浅いものである。炉址は流失範囲に構築されていたものと思われ確認できなかった。

遺物は少ないが、縄文時代前期中葉の土器と石器がある。

土器は、口縁部破片１点（第９図２）で、縄文が施され、内面には横位の条痕がみられる。阿久遺跡でⅢ期Ⅰ群に分類した黒浜式併行である。また、補修孔がみられる。

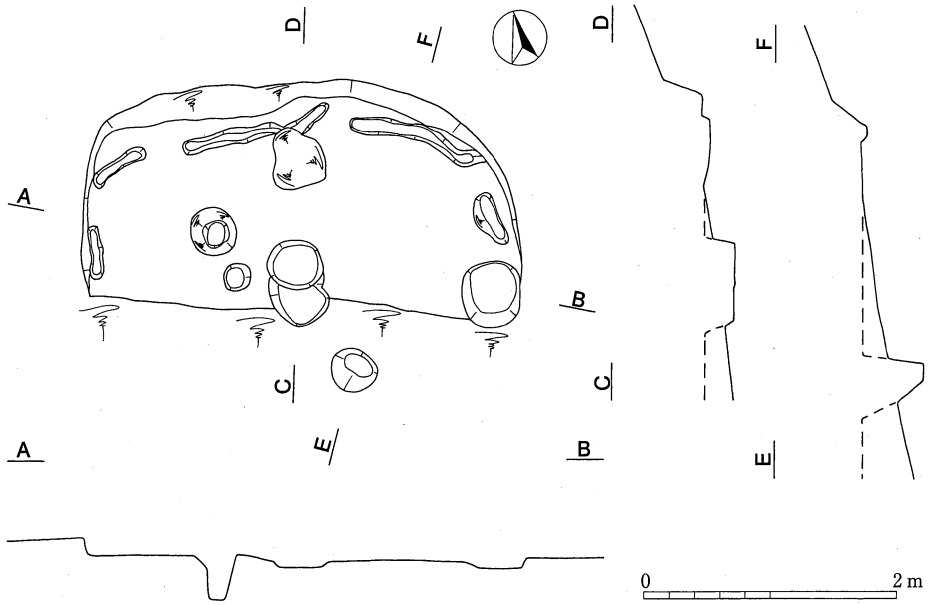
石器は、図示することはできなかったが、黒曜石の剥片１点である。

第７号竪穴住居址（第５・７図、写真19）

南斜面のDQ－39・40・DR－39・40・41・DS－39・40の７グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、第６号竪穴住居址の東に隣接する。この辺りは傾斜が強く南側の半分以上がすでに流失していた。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際は40cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため住居中程では無くなるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

黒色土からローム層中に構築された住居址である。傾斜が強いためローム層中に構築された北側の半分弱が遺存しただけであり詳しいことはわからない。壁・床とも南側の半分以上はすでに流失していたが、竪穴の大きさは長軸348cm、短軸（172）cmである。壁の立ち上がりは普通であるが北壁の一部は緩やかで崩落しているようである。壁高は北が高く40cmをはかるが南に行くに



第７図　第７号竪穴住居址実測図（１：60）

従い低くなる。残存する床面は南に傾斜し、部分的にタタキ床も認められたが総体的には軟弱で良くない。壁直下に幅10～15cm、深さ２～13cmの周溝がみられるが連続しているものではない。検出したピットは、深さ７～37cmとまちまちで柱穴を特定することはできなかった。炉址は流失範囲に構築されていたものと思われ確認できなかった。

遺物は少ないが、縄文時代前期中葉の土器と石器がある。

土器は、胴部の破片が16点である。いずれも小さなもので図示できなかったが、外面には縄文が施され、内面には指頭圧痕が残された黒浜式併行期である。

石器は、図示しなかったが石鏃の破損品１点と黒曜石の剥片３点である。

第８号竪穴住居址（第５・８・９図、写真20）

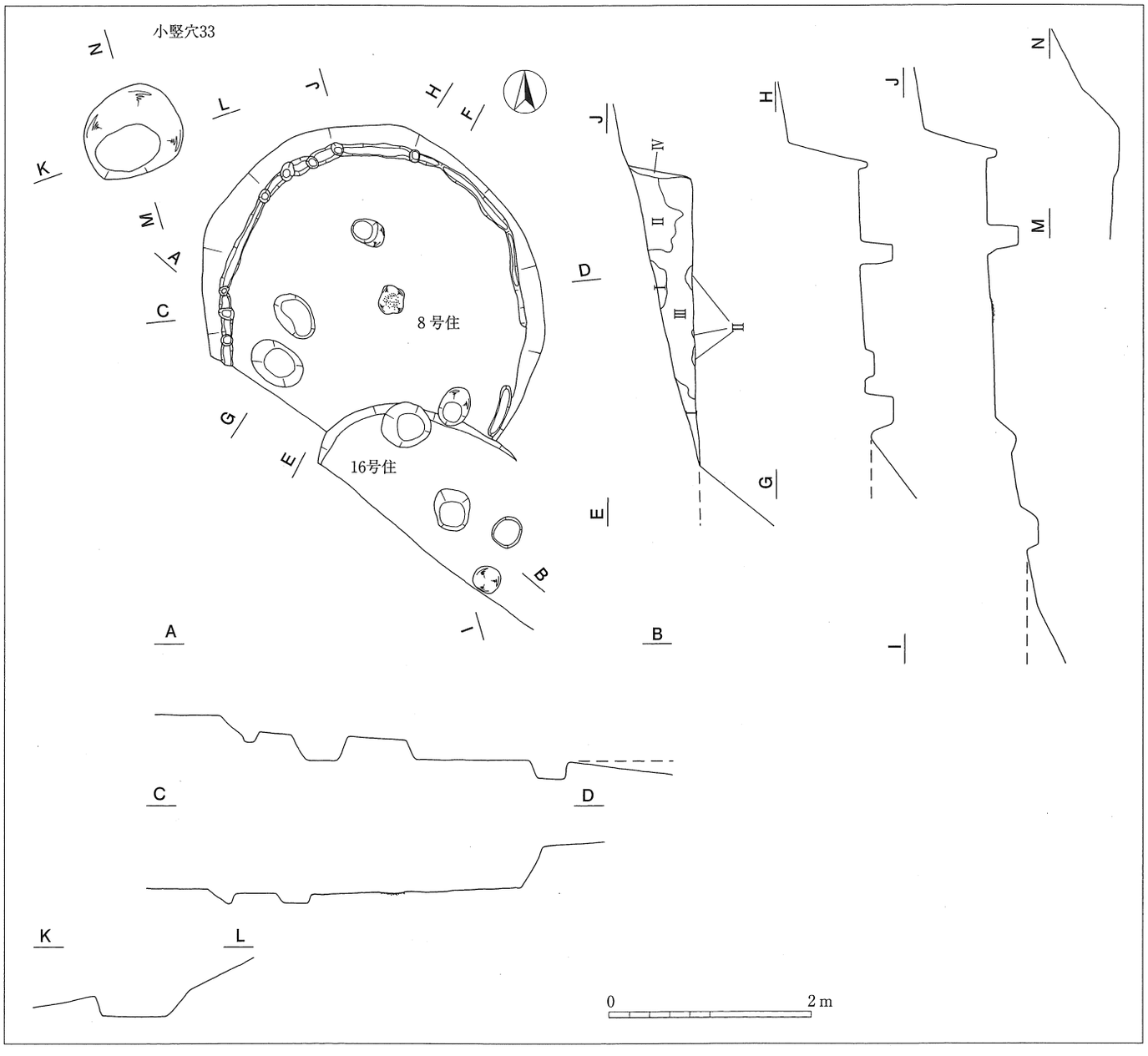
南斜面のDV－37・38・DW－36・37・38の５グリッドに跨る楕円形を呈する竪穴住居址である。第７号竪穴住居址の東南方に位置する。縄文時代の第16号竪穴住居址と重複するが、新旧関係は本址が新しく、第16号竪穴住居址が旧い。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際は70cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため南に行くに従い薄くなる。Ⅰ～Ⅴに分けたが大まかな観察結果は次の通りである。

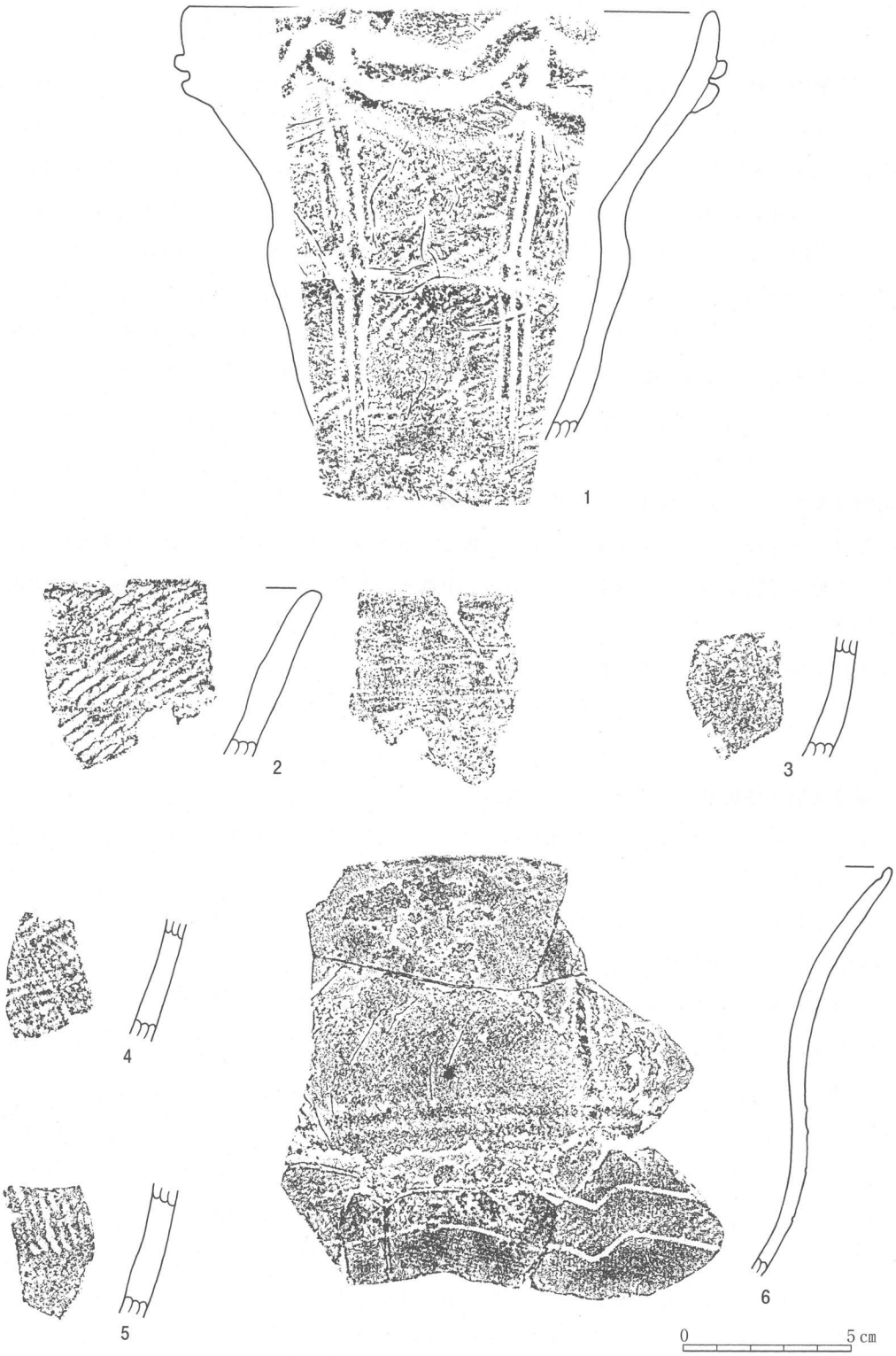
Ⅰ　ローム細粒を包含する黄褐色土である。

Ⅱ　ローム細粒とローム粒を包含する黄色土で、Ⅰよりローム粒が多いものである。そのため色調は黄色味が強くなる。

Ⅲ　ローム細粒とローム粒を包含する黄褐色土で、Ⅱよりローム粒の包含量か少なくなる。



第8図　第8・16号竪穴住居址、小竪穴33実測図（1：60）



第９図　第３・６・８・13号竪穴住居址、小竪穴10出土土器実測図・拓影（１：２）

Ⅳ　ロームで、これは自然傾斜の高い所にあたり、壁土の落下と思われる。

Ⅴ　2～3㎝程のローム粒を包含する黄色土である。

ローム層中に構築されていた住居址であるが、古い農道により南側の一部はすでに欠損し詳しいことはわからない。竪穴の大きさは長軸（300）㎝、短軸330㎝である。壁の立ち上がりはなだらかで、埋土中にロームが多量に包含されており壁土の落下が容易に考えられる。壁高は北壁が高く70㎝を計るが南に行くに従い低くなる。ちなみに東壁は16㎝、西壁は35㎝である。床面は南にわずか傾斜し、部分的にタタキ床も認められたが総体的には良くない。壁直下に幅5～10㎝、深さ3～9㎝の周溝がみられたが、長さ30～100㎝の溝が重なりあった状態で小ピットも重なっている。小ピットは長径10～16㎝、深さは6～28㎝である。小ピットは壁の高い北壁から西壁直下にみられ性格の一端を示唆しているようである。ピットは規格性に乏しいうえに深さは6～26㎝とまちまちで柱穴に特定できるものはない。炉は中央やや北寄りにスリ鉢状に窪んだ地床炉がある。

遺物は少ないが、縄文時代前期中葉の土器がある。

土器は、胴部破片3点（第9図3・4）である。小さなもので詳しいことはわからないが、3は薄手の無文で胎土および成形からいわゆる「中越式」と思われる。4は縄文が施された黒浜式併行期である。

本址は第16号竪穴住居址と重複していたが、流失が著しい強い斜面に構築されたもので、不明瞭な点が多く3の中越式土器は第16号竪穴住居址に帰属するものかもしれない。

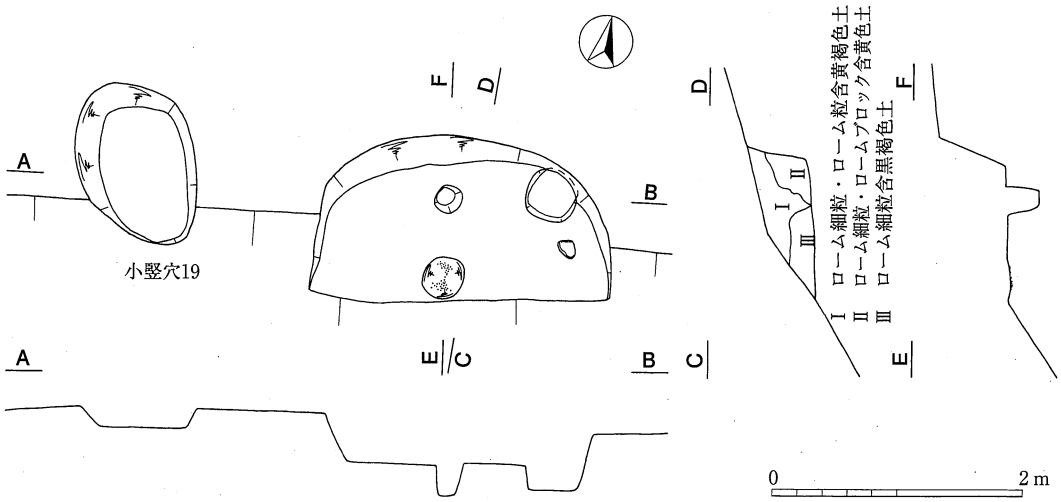
第9号竪穴住居址（第5・10図、写真21）

南斜面のEN－36・37、EO－36・37の4グリッドに跨る竪穴住居址で、第8号竪穴住居址の東方に位置する。

ローム層に掘り込まれたものであるが、昭和51年に村道改良工事で発掘調査をしないまま南側の半分程はすでに破壊されており、詳しいことは不明である。

自然傾斜の南北方向で土層の観察を行なった。しかし、住居址は道路の法面からの発見で、北壁際では53㎝を計るが南に行くにしたがい薄くなり、その先は削平され現存しないため、不明瞭な点は多かったがⅠ～Ⅲに分けた。Ⅰはローム細粒とローム粒を包含する黄褐色土、Ⅱはローム細粒と径 8㎝位のロームブロックを包含する黄色土で、ロームが多いため色調は黄色が増してみえる。また、これは壁土が落下したものと思われる。Ⅲはローム細粒を包含する黒褐色土である。以上のように、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没である。

平面プランは遺存範囲から推測すると不整円形ないしは楕円形と思われる。大きさは長軸（238）㎝、短軸（133）㎝である。壁の立ち上がりは東と西壁は普通で良いが、北壁は崩れが著しかったようで良くない。それは埋土Ⅱの黄色土中でみられた多量のロームブロックから容易に考えられることである。壁の高さは北が高く南に行くに従い低くなる。因みに北壁は53㎝を計る。



第10図　第９号竪穴住居址、小竪穴19実測図（１：60）

床面はやや東に傾斜しているがタタキ床で硬い。Ｐ１とＰ２を検出したが、Ｐ１はその大きさから柱穴と思われるもので深さは27cm。Ｐ２は壁直下からの検出で、深さは19cmと浅いが一部袋状になり貯蔵穴と思われる。炉はスリ鉢状に凹んだ地床炉で、径32cm程が焼土化していた。床面からは据え置かれ状態の礫が出土した。

発見した遺物は少ないが、土器と石器がある。

土器は、胴部の破片が２点ある。いずれも小さなもので図示できなかったが縄文が施された黒浜式併行期である。

石器は、黒曜石の剥片１点である。

第13号竪穴住居址（第５・９・11図、写真40）

南斜面のDM－39・40、DN－39・40の４グリッドに跨る竪穴住居址である。

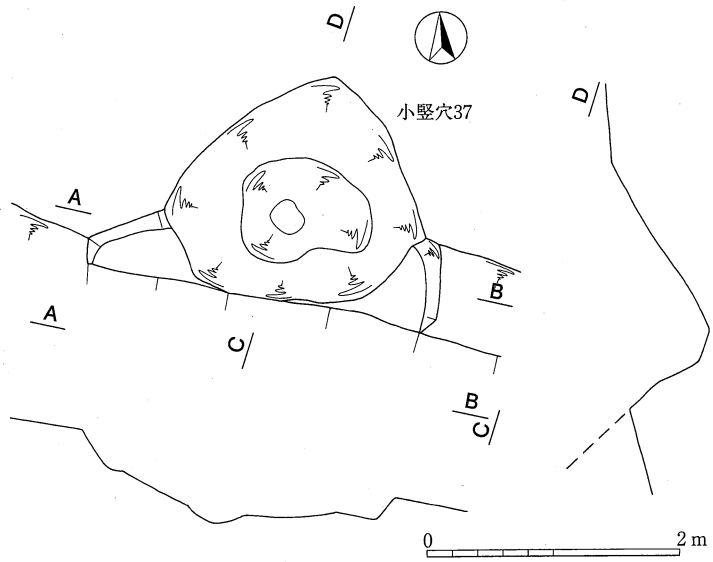
ローム層に掘り込まれたものであるが、古い農道により南側はすでに欠損し残存した範囲は少なく詳しいことは一切わからない。また、この辺りは傾斜が強く土の流失が著しく、現場では確認できなかったが小竪穴37と重複する。新旧関係は不明である。

平面プランは遺存範囲から推測すると隅丸方形と思われる。大きさは長軸290cm、短軸（77）cmである。壁の立ち上がりは普通で、壁高は東と西が22cm、北は32cmを計る。

遺存した範囲が少なく炉址と柱穴を検出できなかったことで問題点は多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

出土した遺物は少ないが、土器と石器がある。

土器は、胴部の破片２点（第９図５）である。小さなもので詳しいことはわからないが、縄文が施された黒浜式併行期である。



第11図　第13号竪穴住居址、小竪穴37実測図（1：60）

石器は、黒曜石の剥片１点である。

第14号竪穴住居址（第５・12図、写真41）

南斜面のDQ－37・38・DR－37・38の４グリッドに跨る竪穴住居址である。

ローム層に掘り込まれたものであるが、古い農道により南側はすでに欠損しており、残存した範囲は少なく詳しいことは一切わからない。

自然傾斜の南北方向で土層の観察を行なった。南側はすでに欠損し現存しなかったため、不明瞭な点が多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

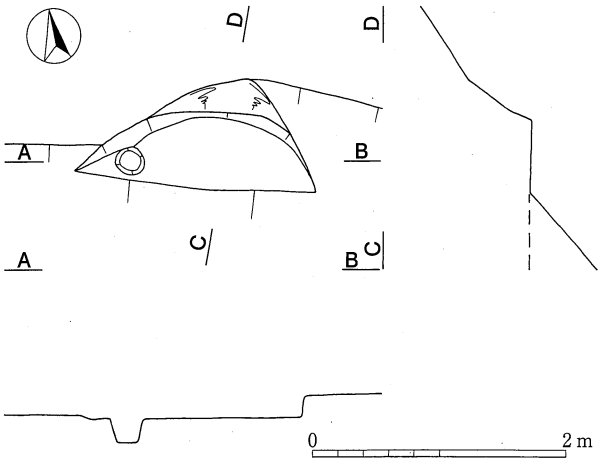
平面プランは遺存範囲から推測すると円形と思われる。大きさは長軸（192）cm、短軸（52）cmである。壁の立ち上がりは普通であるが、北壁の一部は崩れ不安定の所もある。この辺りの傾斜は強く、壁の高さは北が高く南に行くに従い低くなっている。ちなみ北壁は50cmを計る。床面はほぼ水平のタタキ床で硬く良好である。ピットはその大きさから柱穴と思われるもので深さは19cmである。

遺存した範囲が少なく炉址を検出できなかったことで問題点は多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

出土した遺物は少ないが、土器と石器がある。

土器は、破片ばかり４点である。いずれも小さなもので図示できなかったが、縄文が施された前期中葉の黒浜式併行期である。

石器は、黒曜石の剥片１点である。



第12図　第14号竪穴住居址実測図（1：60）

第15号竪穴住居址（第5・13図、写真42）

南斜面のDS－37・38・DT－37・38の4グリッドに跨る竪穴住居址である。

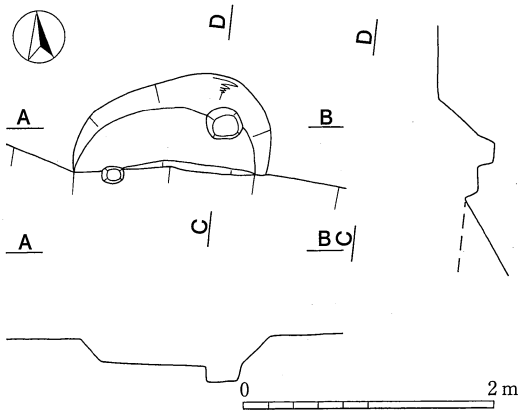
ローム層に掘り込まれたものであるが、古い農道により南側はすでに欠損しており、残存した範囲は少なく詳しいことは一切わからない。

自然傾斜の南北方向で土層観察を行った。すでに南側の多くを欠損しているため不明瞭な点は多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

平面プランは遺存範囲から推測すると円形と思われる。大きさは長軸（161）cm、短軸（81）cmである。壁の立ち上がりはなだらかであまり良くない。この辺りは傾斜が強いため壁高は北が高く南に行くに従い低くなる。ちなみに北壁は35cmを計る。床面はほぼ水平のタタキ床である。ピット2基は柱穴と思われるがいずれも浅いものである。

遺存した範囲が少なく炉址を検出できなかったことで問題点は多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

出土した遺物は皆無で帰属時期を示すことはできないが、検出位置から縄文時代前期に帰属するものと考えた。



第13図　第15号竪穴住居址実測図（1：60）

第16号竪穴住居址（第5・8図、写真43）

南斜面のDV－36・37、DW－36・37の4グリッドに跨る竪穴住居址で、第8号竪穴住居址と重複している。新旧関係については本址が旧く、第8号竪穴住居址が新しい。

ローム層に掘り込まれたものであるが、この辺りは傾斜が強いことから、東壁を確認することはできなかった。また、古い農道により南側はすでに欠損しており、遺存した範囲は少なく詳しいことは一切わからない。

平面プランは遺存範囲から推測すると円形ないしは楕円形と思われる。また、規模については（200）×（200）cmの範囲を確認しただけである。壁の立ち上がりはなだらかであまり良くない。壁高は第8号竪穴住居址構築で削平され12cm程を確認しただけである。ピットは柱穴と考えたが15cm、18cmと浅いものである。スリ鉢状のピットは性格不明である。

遺存した範囲が少なく炉址を検出できなかったことで問題点は多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

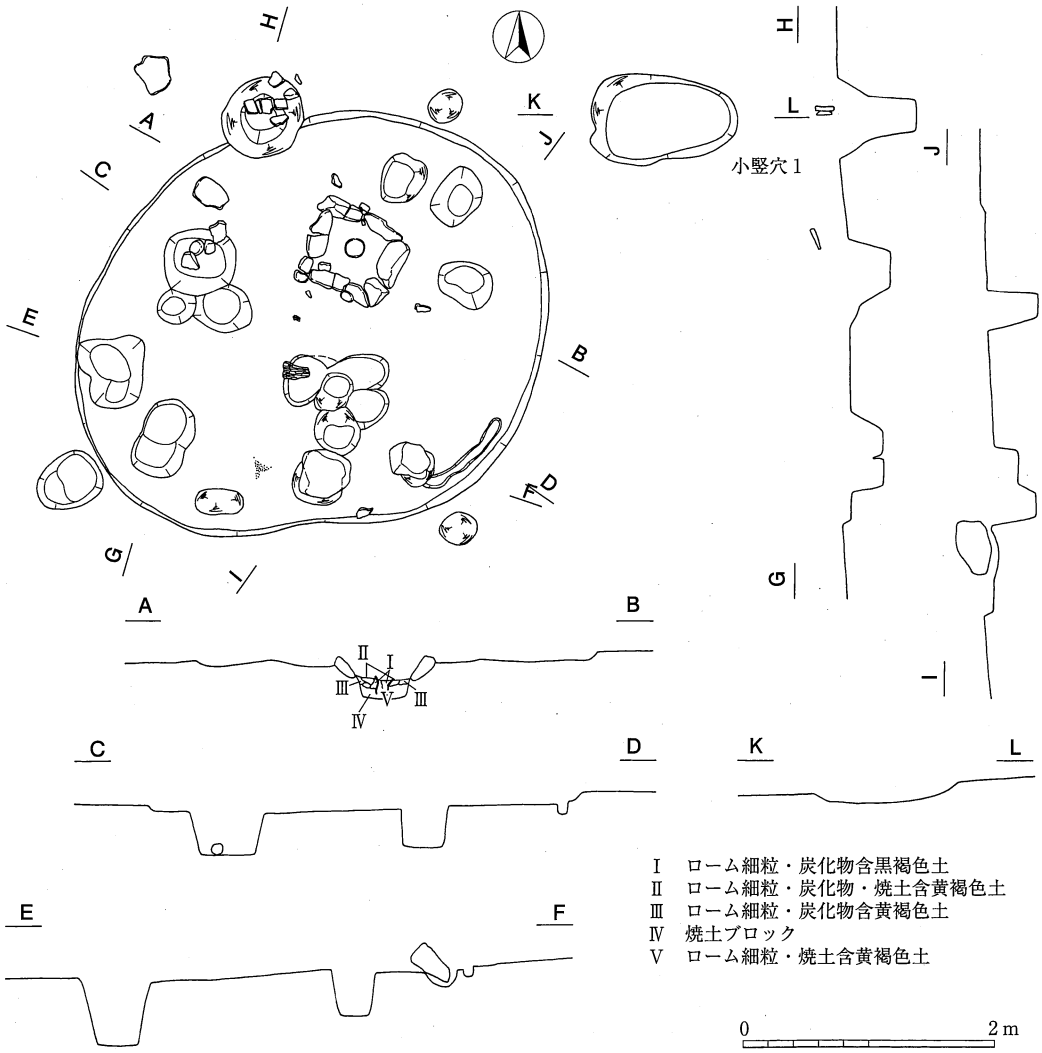
出土した遺物は皆無で帰属時期を示すことはできないが、重複関係で第8号竪穴住居址の黒浜式併行期より旧いことになる。

（1）縄文の中期の竪穴住居址

第3号竪穴住居址（第5・9・14図、写真13～16）

尾根上のEH－66・67、EI－66・67、EJ－66・67の6グリッドに跨る竪穴住居址で、北壁では小竪穴と重複するが新旧関係は不明である。なお、小竪穴には番号を付けてない。

埋土は薄いうえに色調の変化に乏しかったがⅠ～Ⅴに細分した。Ⅰはローム細粒と炭化物を含む黒色土。Ⅱもローム細粒と炭化物を含む黒褐色土で、ローム細粒が多くなることで褐色は増している。Ⅲもローム細粒と炭化物を含む黒褐色土で、色調はⅡとほぼ同じであるがローム細粒が



第14図　第３号竪穴住居址、小竪穴１実測図（１：60）

多くなる。Ⅳはローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土。Ⅴもローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土で、色調はⅣとほぼ同じであるが焼土が多くなる。以上であるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達がみられた自然埋没と考えられるものである。

炉内もⅠ～Ⅴに分けたが、Ⅰはローム細粒と炭化物を含む黒褐色土。Ⅱはローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土。Ⅲはローム細粒と炭化物を含む黄褐色土。Ⅳは焼土。Ⅴはローム細粒と焼土を含む黄褐色土である。

ローム層中に構築されていた。大きさは長軸407cm、短軸347cmである。壁の立ち上がりは普通で、壁高は東６cm、西４cm、南７cm、北３cmといずれも低い。床面はやや南に傾斜し、部分的に

タタキ床も認められたが総体的にはあまりよくない。周溝は南壁下の僅かな範囲にみられた、幅7～10cm、深さは5～11cmである。周溝の末端には31×35cmの大きな礫があり、その西にも40×40cmのやはり大きな礫が床面を掘り窪め据え置かれた状態で並んで出土した。礫間は35cmである。この辺りの壁は内湾する傾向がみられ、壁には7×15cmの礫が埋め込まれていた。入り口部の施設であろう。奥壁側から出土した礫は床面よりも浮いていた。柱穴は基本的に4本であるが、重複する柱穴がみられ建て直しが行われたようである。炉は奥壁よりに土器を埋設した土器埋設石囲炉がある。焚き口部には角柱埋設状の石を据え、残り3辺は平板石を立てたものである。この時期特有の方形切り炬燵状の深いものである。

出土した遺物は少ないが土器と石器がある。

土器は、炉内に埋設された深鉢1点（第9図1）で底部を欠損する。文様構成は6単位で地文に縄文が施された中期後葉の曽利Ⅱ式である。

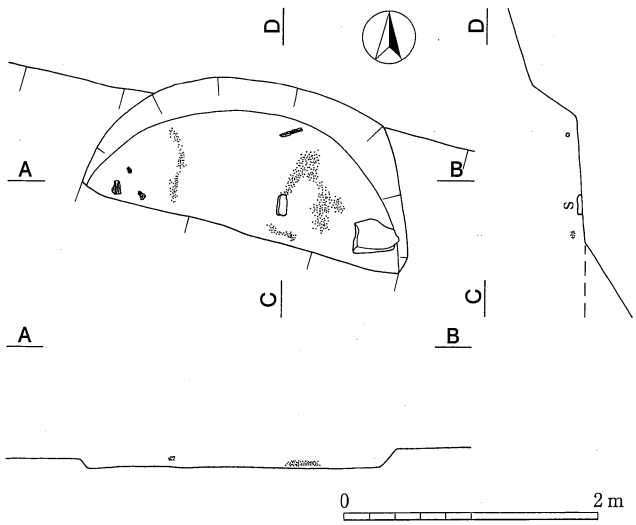
石器は、図示しなかったが凹石2点である。

第5号竪穴住居址（第5・15図、写真17）

南斜面のDO－35・36、DP－35・36の4グリッドに跨る竪穴住居址であるが、南側の半分程は昭和51年に行われた村道改良工事で破壊され詳しいことは不明である。

埋土の観察は自然傾斜の南北方向で行い、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

ローム層に掘り込まれたものであるが、この辺りは傾斜が強く南側は黒色土中に構築されていたようである。



第15図　第5号竪穴住居址実測図（1：60）

平面プランは遺存範囲から推測すると円形と思われる。大きさは長軸（270）cm、短軸（125）cmである。壁の立ち上がりは普通で、壁高は北が高く南に行くに従い低くなる。ちなみに北壁は57cmを計る。床面は、自然傾斜の南にわずかに傾斜し小さな凸凹はみられたが硬いタタキ床で比較的良い。床面に据え置かれた礫は8×17cmと小さいが、東壁直下の礫は28×38cmと大きい。西壁際と北壁直下から炭化材が出土した。広範囲に焼土がみられたが床面よりも浮いたもので、厚いところでは5cmを計るが性格は不明である。

遺存した範囲が少なく柱穴と炉址を検出できなかったことで問題点は多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

出土した遺物は少ないが土器と石器がある。

土器は、同一個体と思われる破片7点がある。強い火熱を受けているためか器面はもろく剥落箇所が多く図示してないが、地文に縄文を施し粘土紐を貼り付けた口縁部破片で、胎土をみる限りでは搬入土器である。帰属時期は前期最末ないしは中期初頭期であろう。

石器は、図示してないが黒曜石の剥片12点で、内2点には使用痕がみられる。

（2）小竪穴

小竪穴は、38基を検出調査した。帰属時期を明確にできる遺物が伴出した小竪穴は少なく、性格がわかるものも少ない。

帰属時期のわからない小竪穴の方が多いが、便宜的にここで記載しておきたい。

小竪穴の調査は、自然傾斜の方向ないしは長軸方向で半分の精査を進め、埋土の観察後に残り半分の精査を実施した。土層については、注意されるものについては記載した。

小竪穴1（第5・14図）

尾根上のEK－67グリッドで検出した。縄文時代中期の竪穴第3号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は120×73cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりはなだらかで、西壁はしっかりしていない。底面には小さな凸凹がみられる上にやや丸みを持ち、深さは17cmである。

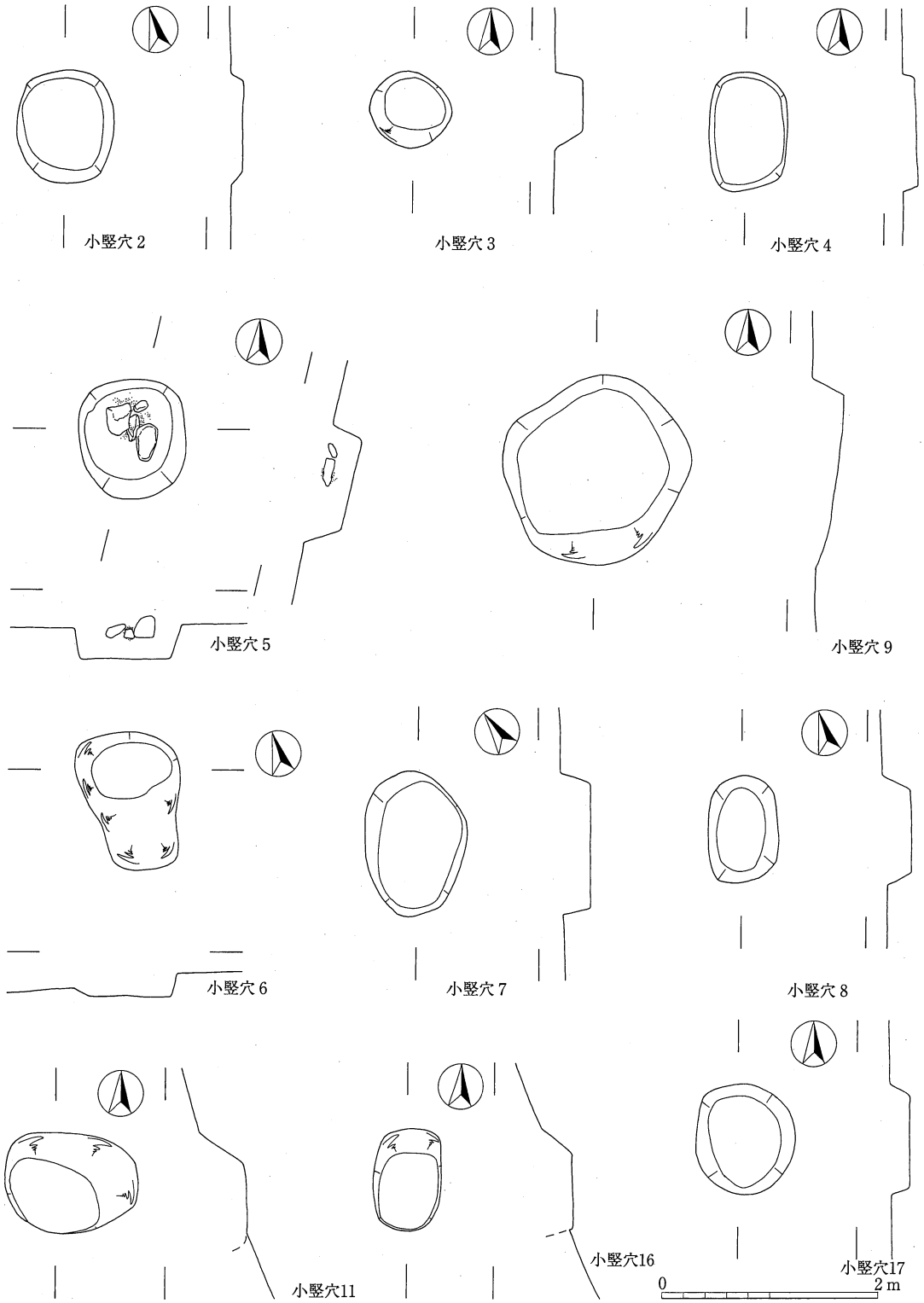
出土した遺物は皆無である。

小竪穴2（第5・16図）

尾根上のEF－67、EG－67・68グリッドで検出した。縄文時代中期の第3号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は104×89cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、底面には小さな凸凹がみられるがほぼ平らで、深さは13cmである。

出土した遺物は縄文土器の底部破片1点である。



第16図　小竪穴2～9・11・16・17実測図（1：60）

小竪穴３（第５・16図）

尾根上のEJ－50・51グリッドで検出した。平安時代の第１号竪穴住居址の東南方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は76×70cmの不整円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。深さは29cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴４（第５・16図）

尾根上のDN－52グリッドで検出した。平安時代の竪穴第１号竪穴住居址の西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は109×72cmの長楕円形を呈すが、長辺は直線的で短辺が張り出した隅丸の長方形に見ることもできる。埋土は薄いがレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりは良く、底面は平らで僅かに南傾斜している。深さは14cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴５（第５・16図、写真44）

尾根上のDL－56・57グリッドで検出した。小竪穴４の北方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は110×100cmの不整円形を呈する。検出面から埋土中のほぼ同レベルから４点の礫が出土し、その周りには薄い焼土と炭化物が認められた。焼土の状態は火床とは思えないものである。壁の立ち上がりは良く、底は壁際がやや凸凹しているがほぼ平らで、深さは33cmである。

出土した遺物は縄文土器の底部破片３点で、同個体土器であり２点は接合する。

小竪穴６（第５・16図）

尾根上のDK－55グリッドで検出した。小竪穴５の南西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたものであるが、南壁付近は撹乱のためプランは明確にできない。平面形は98×(70) cmの楕円形を呈し、壁の立ち上がりはなだらかなうえに不安定であるが東壁は比較的良い。底面はほぼ平らで深さは21cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴７（第５・16図）

尾根上のDV－46グリッドで検出調査した。小竪穴４の東南方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は133×93cmの楕円形を呈し、壁の立ち上がりは比較的良い。底面は小さく凸凹しているがほぼ平らで深さは29cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴８（第５・16図）

尾根上のDS－44・45グリッドで検出した。小竪穴７の南西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は101×65cmの楕円形を呈する。埋土はレンズ状の堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは28cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴９（第５・16図、写真45）

尾根上のCO－49・50、CP－49・50グリッドで検出した。平安時代の第10号竪穴住居址の東北方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は168×167cmの不整円形を呈する。埋土はレンズ状の堆積が認められた自然埋没と考えられるもので、三角堆土中にロームブロックが包含されていたことは壁土が落下したものと思われる。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らであるが北に傾斜している。深さは深い所で30cmを計る。

使用当時は円形のしっかりした小竪穴であったように思われる。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴10（第５・９・17・22図、表３、写真46～51）

尾根上のDN－72・73、DO－72・73グリッドで検出した。遺構の中では一番北に位置する。

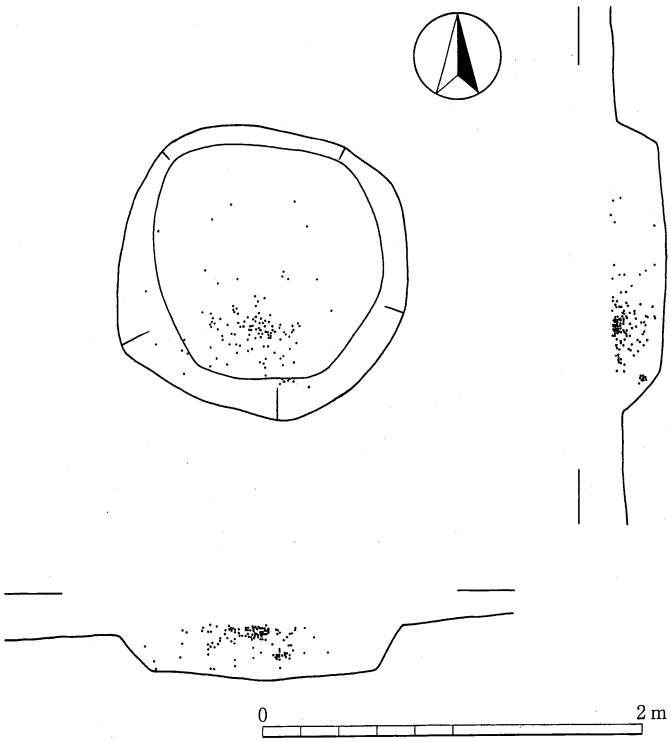
ローム層に掘り込まれたもので、平面形は 151×151cmの不整円形を呈する。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、底面はほぼ平らで深さは29cmである。

出土した遺物は土器破片と黒曜石がある。

土器は同一個体の破片９点（第９図６）である。土器外面には炭化物が付着しており拓本は不鮮明であるが縄文時代後期の堀之内期である。

石器は石鏃１点（第22図１）と黒曜石の原石127点である。原石は検出面から埋土中の出土で、表３に示したように比較的小さなものである。出土状態を第17図に示したが検出面付近からが最も多く、すでに重機で除去した上層に包含されていたことが容易に考えられるものであり、全容を明らかにできなかったことが残念である。

帰属時期は、指標となる土器から縄文時代後期堀之内期であるが、この時期の遺構は本址だけである。黒曜石の出土数からみて貯蔵穴と考えたいが、黒曜石の平面分布は小竪穴の南側に片寄っている。垂直分布は検出面付近が最も多く、底面に密着していたものは１点だけである。黒曜石の貯蔵穴と考えたいが、この出土状態では無理な点が多く性格については不明といわざるをえない。



第17図　小竪穴10実測図（1：40）

小竪穴11（第5・16図）

南斜面のEU－38、EV－38グリッドで検出した。遺構の中では一番東に位置する。

ローム層に掘り込まれたものであるが、昭和51年の村道改良工事で南側はすでに破壊されており明確なことはわからない。平面形は（125）×（95）cmの楕円形であったものと思われる。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるもので、ロームブロックが包含されていたことは壁土が落下したものと思われる。西壁の立ち上がりは良いが、北壁と東壁はなだらかなうえに不安定である。底面は小さく凸凹するがほぼ平らで、深さは46cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴12・13（第5・18図）

南斜面のEA－35・36、EB－35・36グリッドで検出した。

ローム層に掘り込まれた重複するもので、小竪穴12と小竪穴13の2基である。昭和51年の村道改良工事ですでに南側は破壊されてしまい明確なことはわからない。また、調査でも大きなミスをしている。それは小竪穴13を完掘した時点で実測作業を行わず、続けて小竪穴12の精査を進めたことである。

埋土は2基ともにレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。土層の観察で

は小竪穴13が新しく、小竪穴12が旧い。しかし、前記したように小竪穴13と小竪穴12を明らかにできる実測図を残すことができなかった。

小竪穴２基が重複した状態の平面形は（150）×（120）cmの楕円形で、底面はほぼ平で深さは48cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴14（第５・18図）

南斜面のEB－35、EC－35・36グリッドで検出した。小竪穴12・13に隣接する。

ローム層に掘り込まれたもので、昭和51年の村道改良工事ですでに破壊された所がある。平面形は100×97cmの不整円形を呈する。この辺りは傾斜が極めて強く上部は流失しているように思われるが、壁の立ち上がりは東と西壁は良いが、北壁はなだらかな上に不安定である。南壁は４cm程が残存しただけで詳しいことはわからない。底面はほぼ平らで壁の高い北側で深さは45cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴15（第５・18図、写真52・53）

南斜面のEB－35、EC－35グリッドで検出した。小竪穴12・13、14に隣接する。

ローム層に掘り込まれたものであるが、昭和51年の村道改良工事で上方はすでに破壊されていた。平面形は75×75cmの円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりはほぼ垂直でしっかりしていたが南壁の一部は袋状になる。埋土には多量のロームブロックが包含され壁土の落下が容易に考えられるもので、当初は袋状の小竪穴のようである。底面は平らで壁際に径６～８cmの小穴が８基穿たれているが、深さは３～13cmで規格性はみられない。現状の深さは北の深いところで72cmを計るが、前記したように上部を欠損しているため使用当時はもっと深いものであったものと思われる。

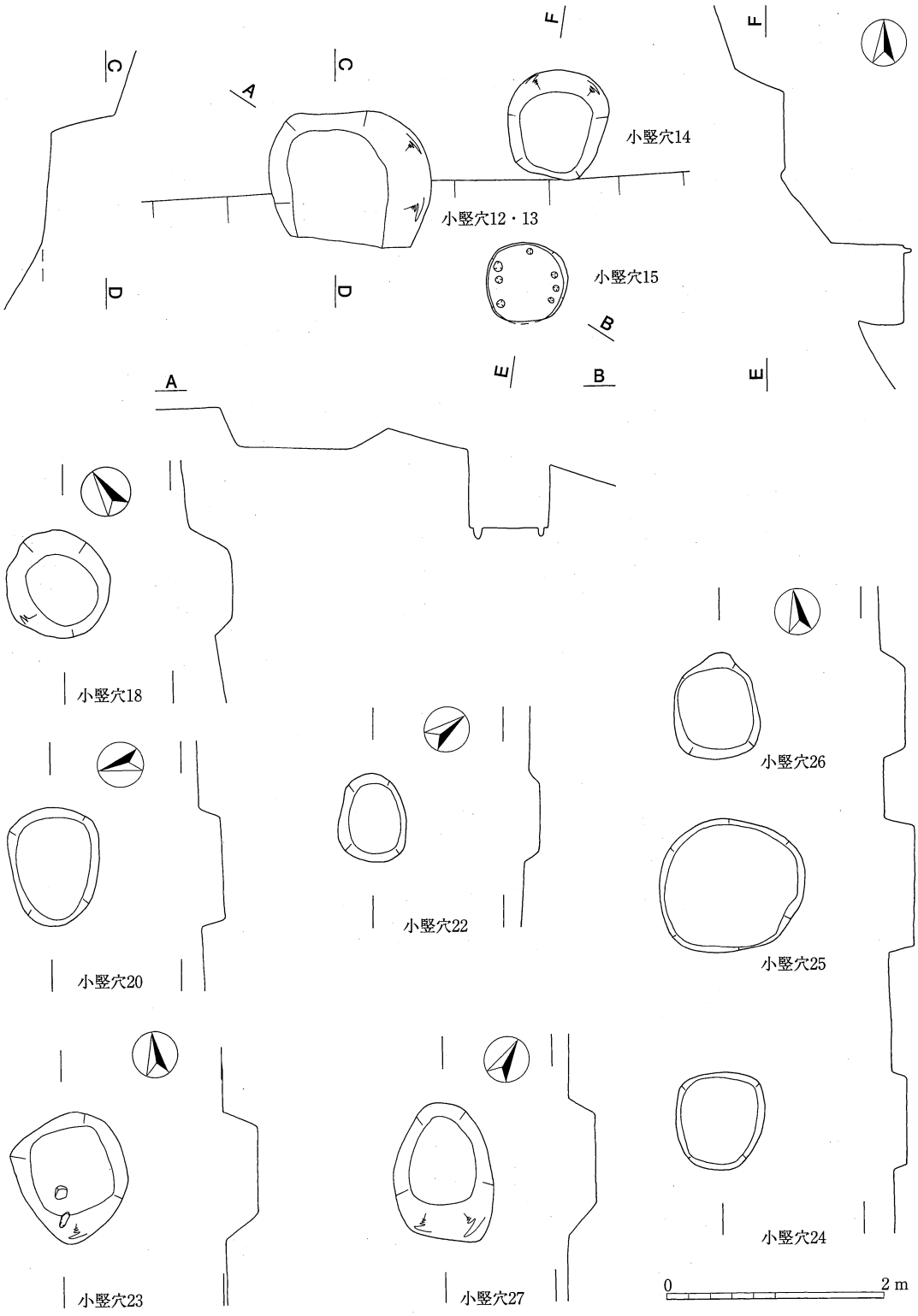
陥し穴と考えるにはやや規模が小さい上に、小穴の位置に問題点が残る。南壁の一部が袋状であることから貯蔵穴と考えておきたい。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴16（第５・16図）

南斜面のDX－37・38グリッドで検出した。縄文時代の第８号竪穴住居址の東方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は96×62cmの長楕円形を呈する。この辺りの傾斜は極めて強く、上部はすでに流失しているものと思われる。壁の立ち上がりは東と西壁は比較的良いが、北壁はなだらかでしっかりしたものではない。また、南壁はわずかに認められただけである。底面は平らで深さは壁の高い北側で29cmを計る。



第18図　小竪穴12～15・18・20・22～27実測図（1：60）

出土した遺物は皆無である。

小竪穴17（第５・16図）

尾根上のDO－67、DP－67グリッドで検出した。小竪穴10の南に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は100×94cmの不整円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、底面はほぼ平らで深さは19cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴18（第５・18図、写真54～57）

南斜面のDX－40・41、DY－40・41グリッドで検出した。縄文時代の第８号竪穴住居址の北東に位置する。検出時点では集石と考え調査を進め、下層の掘り込みを確認した時点で小竪穴に認定したものである。

ローム層に掘り込まれたもので、写真54～56でみるように上面に集石を伴うが、集石の実測図を調査担当者が紛失したため図示できなかった。集石の石は写真でみるように検出面に最も多く、底面に接するものは少なく焼土は認められなかった。したがって集石炉とは異なるものである。小竪穴の平面形は104×100cmの円形で、壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは36cmである。

出土した遺物は平安時代の須恵器の甕破片１点がある。

小竪穴19（第５・10図）

南斜面のEM－36、EN－36グリッドで検出した。縄文時代の第９号竪穴住居址の西に隣接する。

ローム層に掘り込まれたもので、昭和51年の村道改良工事ですでに破壊された所がある。平面形は139×94cmの楕円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。北壁際には壁土が落下したと思われるロームブロックがみられた。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは30cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴20（第５・18図）

尾根上のDF －53、DG －53グリッドで検出した。平安時代の第１号竪穴住居址の西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は109×84cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通で、底面は僅かに西傾斜するがほぼ平で深さは22cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴21（第５・19図、写真58・59）

尾根上のCJ－58、CK－57・58、CL－57グリッドで検出した。平安時代の第10号竪穴住居址の北方に位置する。

埋土は、第19図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。土層の大まかな観察結果は次の通りである。

Ⅰ　ローム細粒を包含する黒褐色土。

Ⅱ　ローム細粒を包含する黒褐色土で、Ⅰ層よりもローム粒の細かいものが多い。

Ⅲ　黄褐色土で黒褐色土が混ざる。

Ⅳ　ソフトロームを包含する黒褐色土。

Ⅴ　黄褐色土で黒褐色土が混ざり、Ⅲ層とほぼ同様である。

Ⅵ　黄褐色土でしまりがなくザラザラしている。

Ⅶ　ソフトロームを包含する黒褐色土。

Ⅷ　ソフトロームを包含するロームブロック。

Ⅸ　ソフトロームを包含する黒色土。

Ⅹ　粘性の強い黒色土。

平面形は380×132cmの長楕円形を呈し、深さ120cmで底面は平らで、底面の規模は292×30cmである。壁の立ち上がりは底から80cm程はしっかりしていたが、それより上はスリ鉢状になり、多量のロームブロックが包含されていることは壁土の落下が著しかったようである。底面には径６～７cm、深さ12～20cmの小穴がほぼ垂直に６基穿たれている。小穴は逆茂木に係るもので陥し穴である。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴22（第５・18図）

尾根上のBI－52・53グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址の北方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、南側は耕作の畝で破壊された所がある。平面形は82×63cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平で深さは12cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴23（第５・18図）

尾根上のBD－50、BE－50・51グリッドで検出した。小竪穴22の西南方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は118×102cmの楕円形を呈する。検出面から板状の小礫２点が出土したが性格は不明である。壁の立ち上がりは比較的良く、底面はほぼ平らで深さは33cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴24（第５・18図、写真60）

尾根上のDG－61グリッドで検出した。小竪穴20の北方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は90×82cmの楕円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりは比較的良く、底面はほぼ平で深さは14cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴25（第５・18図、写真60）

尾根上のDG－62、DH－62グリッドで検出した。小竪穴24に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は131×126cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりは良い。底面近くで焼土を確認したが火床と考えられる状態ではない。底面はほぼ平らで深さは30cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴26（第５・18図、写真60）

尾根上のDG－63、DH－63グリッドで検出した。小竪穴25に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は99×78cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは24cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴27（第５・18図）

尾根上のDA－61・62、DB－61・62グリッドで検出した。小竪穴25の西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は127×90cmの楕円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はほぼ平らで深さは26cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴28（第５・19図）

南斜面の肩部にあたるCJ－44、CK－44グリッドで検出した。平安時代の第10号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は115×95cmの楕円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるもので、ロームブロックが包含されていたことは壁土が落下したものと思われる。南・北・西壁の立ち上がりは普通であるが、東壁はややなだらかで不安定になる。底面は小さく凸凹するが総体的にはほぼ平らで深さは29cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴29（第５・19図）

南斜面の肩部にあたるCG－44・45グリッドで検出した。平安時代の第10号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は121×120cmの不整円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるもので、ロームブロックが包含されていたことは壁土が落下したものと思われる。壁の立ち上がりはなだらかな上に不安定で良くない。底面は小さく凸凹するが総体的にはほぼ平らで深さは26cmである。

小竪穴28と本址は平面形に違いはみられたが、検出地点が近いうえに、共通する点が多く同様の性格を有するもののようである。感覚的には第10号竪穴住居址と同じ平安時代と言いたいところであるが、帰属時期の決め手となる遺物の出土は皆無である。

小竪穴30（第５・19図）

南斜面のDP－41、DQ－41グリッドで検出した。縄文時代の第６号・第７号竪穴住居址と隣接している。

ローム層に掘り込まれたものであるが、この辺りの傾斜は強い。平面形は118×82cmの不整楕円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるもので、ロームブロックが包含されていたことは壁土が落下したものと思われる。壁の立ち上がりはなだらかな上に小さな凸凹がみられ良くない。底面も壁面同様に小さく凸凹しやはり良くないが、総体的にはほぼ平らで深さは31cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴31（第５・19図）

尾根上のBN－57・58、BO－57・58グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址の北方に位置する。

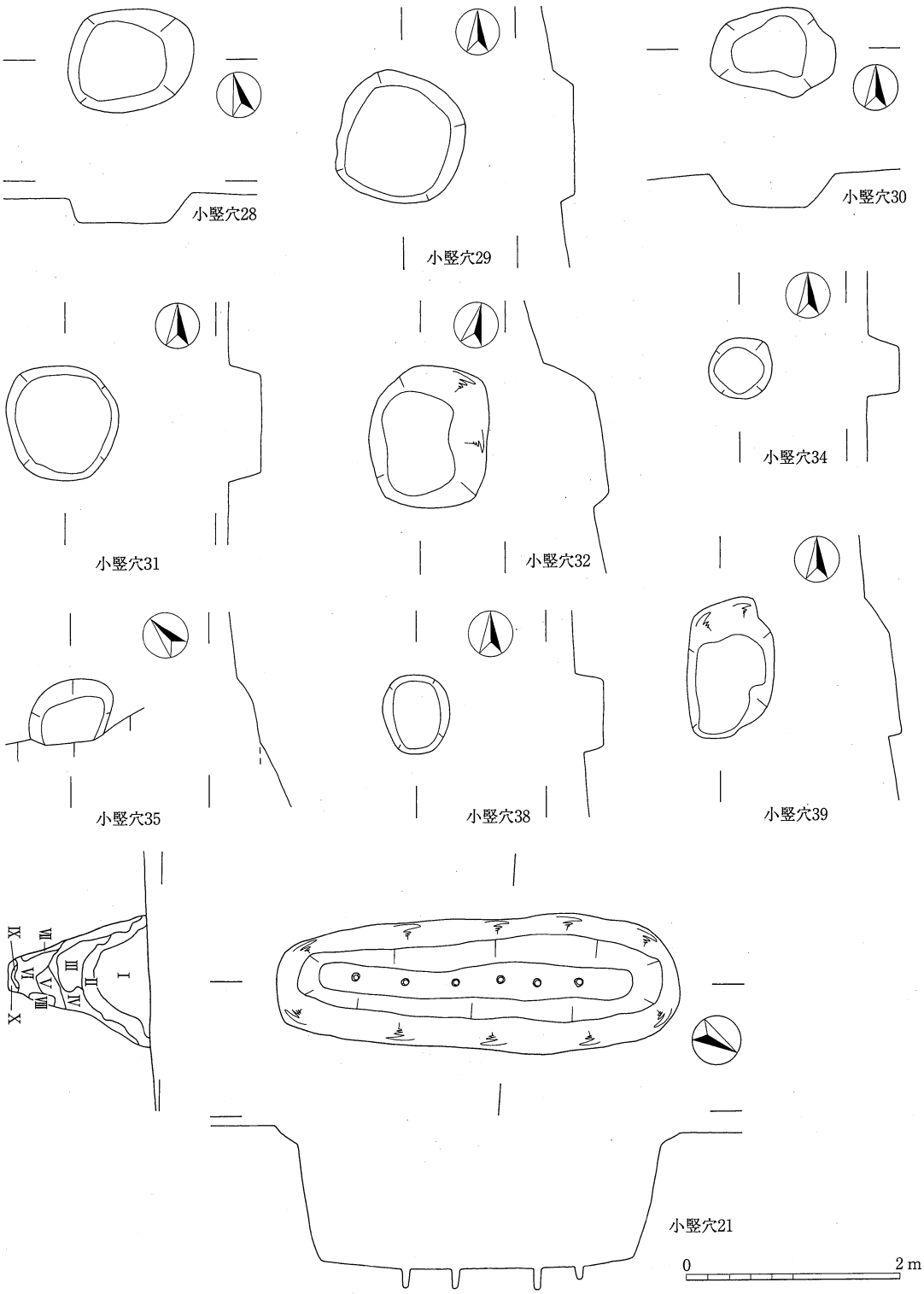
ローム層に掘り込まれたもので、埋土は色調の変化に乏しく黒褐色土の単層であるが自然埋没と考えられる。平面形は108×104cmの不整円形を呈する。壁の立ち上がりは良い。底面は小さく凸凹するが総体的にはほぼ平らで深さは33cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴32（第５・19図）

南斜面のBD－42グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址の西方に位置する。

ローム層に掘り込まれたものであるが、桑の根による撹乱が著しくやや不明瞭であった。平面



第19図　小竪穴21・28～32・34・35・38・39実測図（1：60）

形は131×110cmの楕円形を呈する。埋土中にはザラザラしたロームが多量に包含されており人為的に埋められたものと思われる。壁の立ち上がりはなだらかであるが西壁はやや良くなる。底面は平らでその形状は繭形で自然傾斜同様に南傾斜し、深さは壁の高い北で48cmを計る。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴33（第５・８図）

南斜面のDU－38グリッドで検出した。縄文時代の第８号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は100×87cmの楕円形を呈する。埋土中にはロームブロックが多量に包含されていたがしまりがなく人為的に埋められたものかもしれない。底面は傾斜するが平で深さは40cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴34（第５・19図）

尾根上のDO－72グリッドで検出した。小竪穴10に隣接している。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は62×58cmの不整円形を呈する。埋土はレンズ状堆積が認められた自然埋没と考えられるものである。壁の立ち上がりは普通で、底面は平らで深さ31cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴35（第５・19図）

南斜面のDO－39グリッドで検出した。縄文時代の第６号・第７号・第13号竪穴住居址に隣接している。

ローム層に掘り込まれたものであるが、南側は農道（取り付け道）ですでに破壊されており明確なことは不明である。平面形は78×(59) cmの楕円形を呈すると思われる。壁の立ち上がりはなだらかな上に小さな凸凹がみられる。底面もやはり壁面同様に小さく凸凹し自然傾斜の南に傾き良くない。深さは14cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴36（第５・29図）

南斜面のBL－40・41グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址と重複している。重複による新旧関係は第11号竪穴住居址が新しく、本址が旧い。

黒褐色土層に構築されたものであるが、第11号竪穴住居址との重複で西側を、新しい炭焼きの穴に東側を切られ、昭和51年の村道改良工事で南側の一部は破壊されていた。埋土は色調の変化に乏しく黒褐色土単層であるが自然埋没と思われる。遺存範囲から平面形と規模を推定すると円形で（94）×（69）cm、深さ35cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴37（第５・11図）

南斜面のDN－40、DO－39・40グリッドで検出した。縄文時代の第13号竪穴住居址と重複している。重複による新旧関係は第13号竪穴住居址が新しく、本址が旧い。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は212×(185) cmの不整円形を呈するが、壁はだらだらと落ち込みロームマウンドと思われるが、現場で確信がもてなかったため小竪穴37とした。深さは117cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴38（第５・19図）

南斜面の肩部にあたるBK－48・BK－49グリッドで検出した。第11号竪穴住居址の北方に位置する。検出時点では隣接する近世の墓壙１同様の性格を考え精査を進めた。しかし、墓壙と確信がもてる遺物の出土がなく小竪穴38に呼び改めた。ローム層に掘り込まれたもので、検出面から小竪穴に落ち込む状態で握り拳から人頭大の礫８点が出土した。埋土は人為的に埋め戻された状態である。平面形は74×64cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは良く、底面は平らで深さ27cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴39（第５・19図）

南斜面の肩部にあたるBH－47、BI－47グリッドで検出した。小竪穴38同様に墓壙と考え精査を進めたが、墓壙と確信がもてる遺物の出土がなく小竪穴39と呼び改めた。ローム層に掘り込まれたもので、検出面に平板状の大きな礫２点と人頭大の礫２点が上面を覆う状態で出土した。埋土は人為的に埋め戻された状態である。平面形は133×81cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりはなだらかで、底面はやや南傾斜するがほぼ平らで深さ27cmである。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴40～44

南斜面の肩部で第11号竪穴住居址と重複する５基の小竪穴である。検出時点では竪穴住居址と考え精査を進めたもので整理作業で小竪穴番号を付した。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴40（第５・29図）

BL－42グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址と重複するが、竪穴住居址が新し

く本址が旧い。また、小竪穴41・43とも重複するが埋土は色調の変化に乏しく新旧関係は明らかにできなかった。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は（158）×（31）cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通であるが、北壁の一部は袋状になる。底面は平らでやや東に傾斜し、深さは東で18cmを計る。

小竪穴41（第５・29図）

BK－42・BL－42グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址と重複するが、竪穴住居址が新しく本址が旧い。また、小竪穴40・42・43とも重複するが埋土は色調の変化に乏しく新旧関係は明らかにできなかった。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は（121）×（24）cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通で、底面は平らで深さは50cmを計る。

小竪穴42（第５・29図）

BK－42グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址と重複するが、竪穴住居址が新しく本址が旧い。また、小竪穴41・43・44とも重複するが埋土は色調の変化に乏しく新旧関係は明らかにできなかった。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は（98）×（71）cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通で、底面は平らで深さは43cmを計る。

小竪穴43（第５・29図）

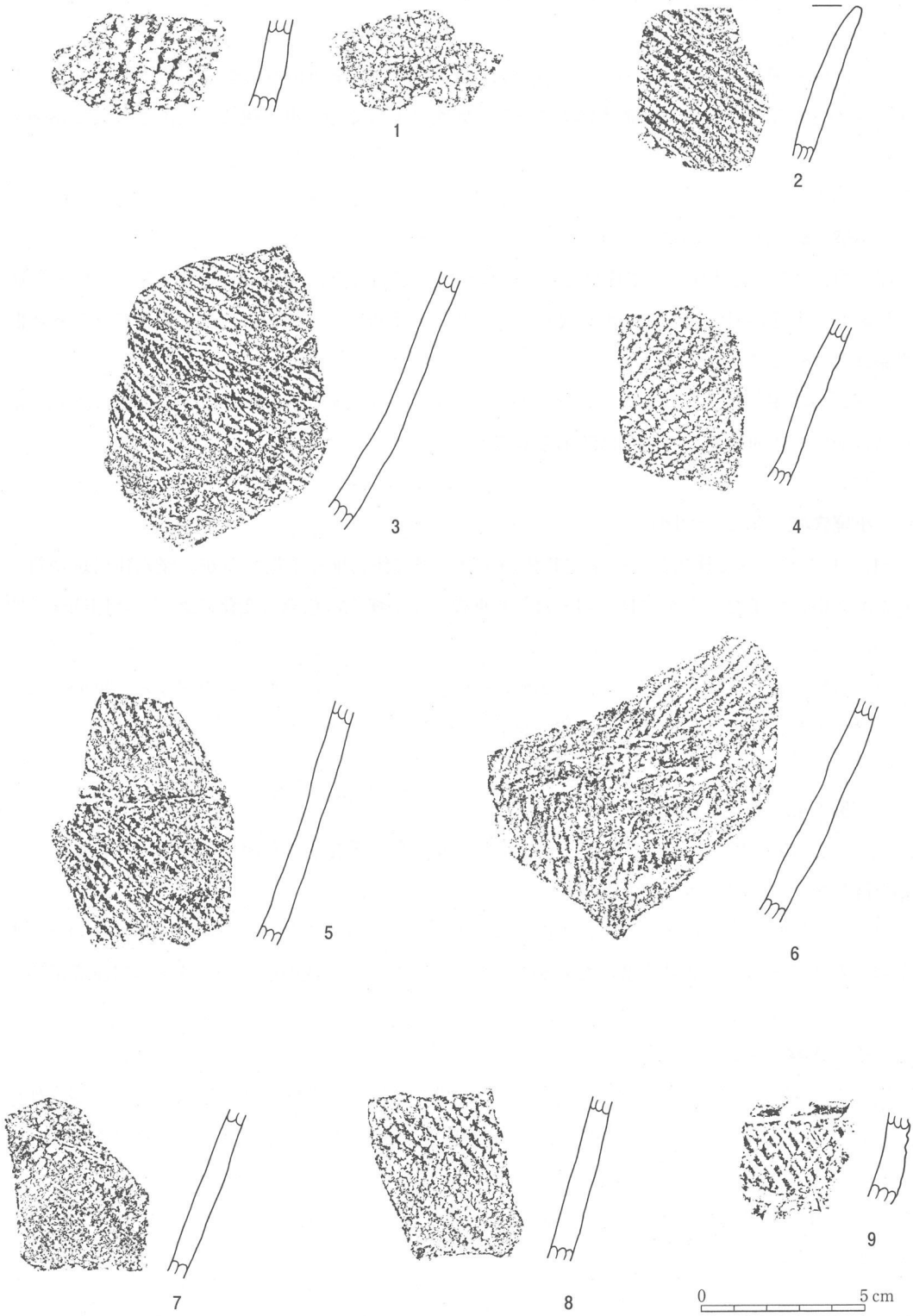
BK－42・BL－42グリッドで検出した。小竪穴40～42と重複するが埋土は色調の変化に乏しく新旧関係を明らかにできなかった。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は（91）×（82）cmの不整楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通であるが、北は崩壊のためかだらだらとしている。底面は平らで深さは31cmを計る。

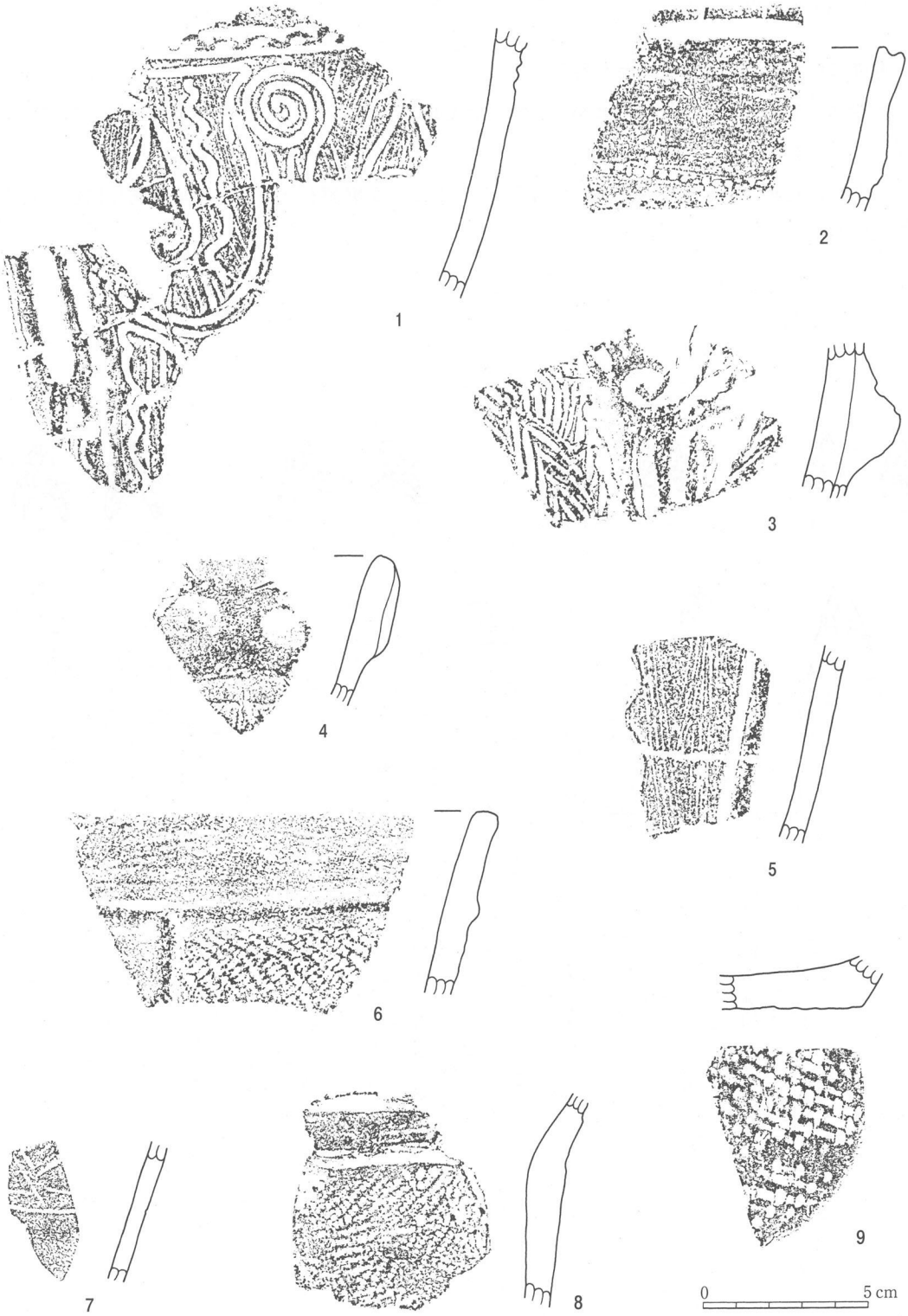
小竪穴44（第５・29図）

BJ－42・BK－42グリッドで検出した。平安時代の第11号竪穴住居址と重複するが、竪穴住居址が新しく本址が旧い。また、小竪穴42とも重複するが埋土は色調の変化に乏しく新旧関係は明らかにできなかった。

ローム層に掘り込まれたもので、平面形は（93）×（91）cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは普通で、底面は平らで深さは29cmを計る。



第20図　遺構外出土土器拓影その１（１：２）



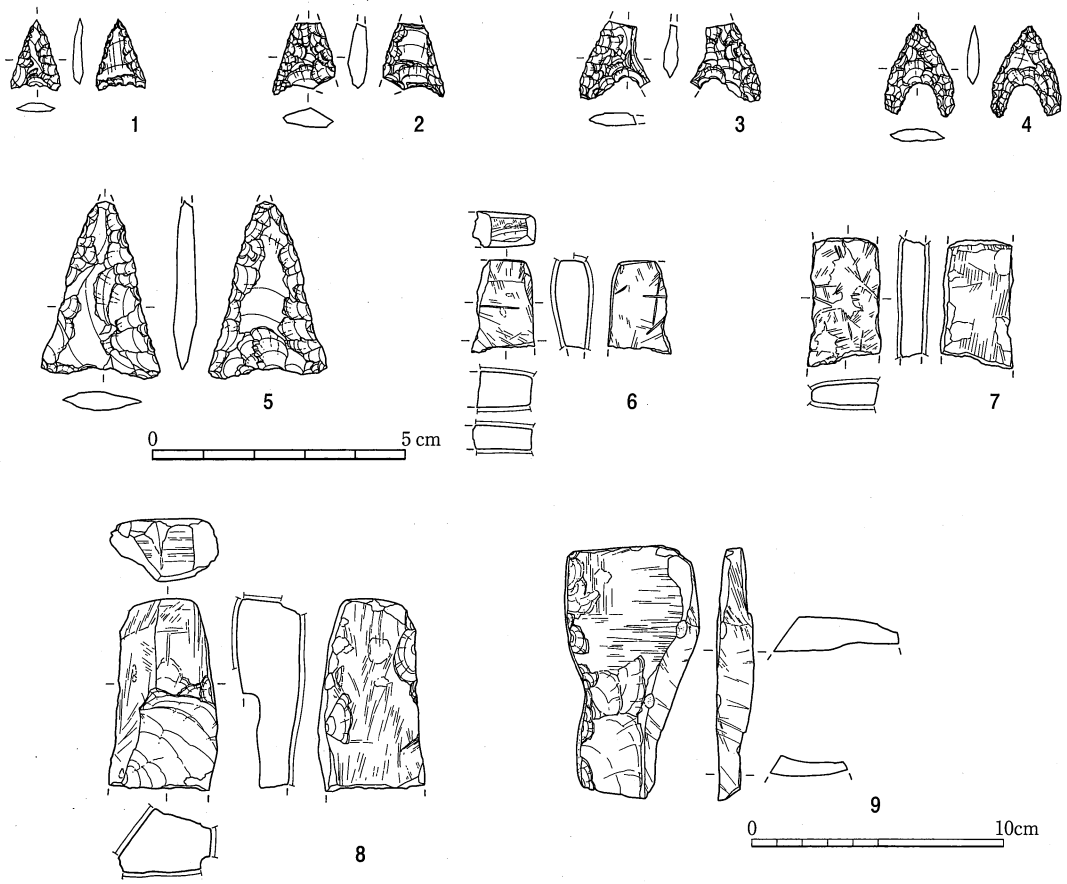
第21図　遺構外出土土器拓影その２（１：２）

（3）遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物は土器と石器がある。

土器は、前期、中期、後期（第20・21図）で復原できるものはない。当地方の遺跡としては少ないようである。

石器は、石鏃４点（第22図２～５）、図示しなかったが磨製石斧１点、黒曜石剥片14点、剥片２点である。



第22図　遺構外出土石器・石製品実測図（１～５　２：３、６～９　１：３）

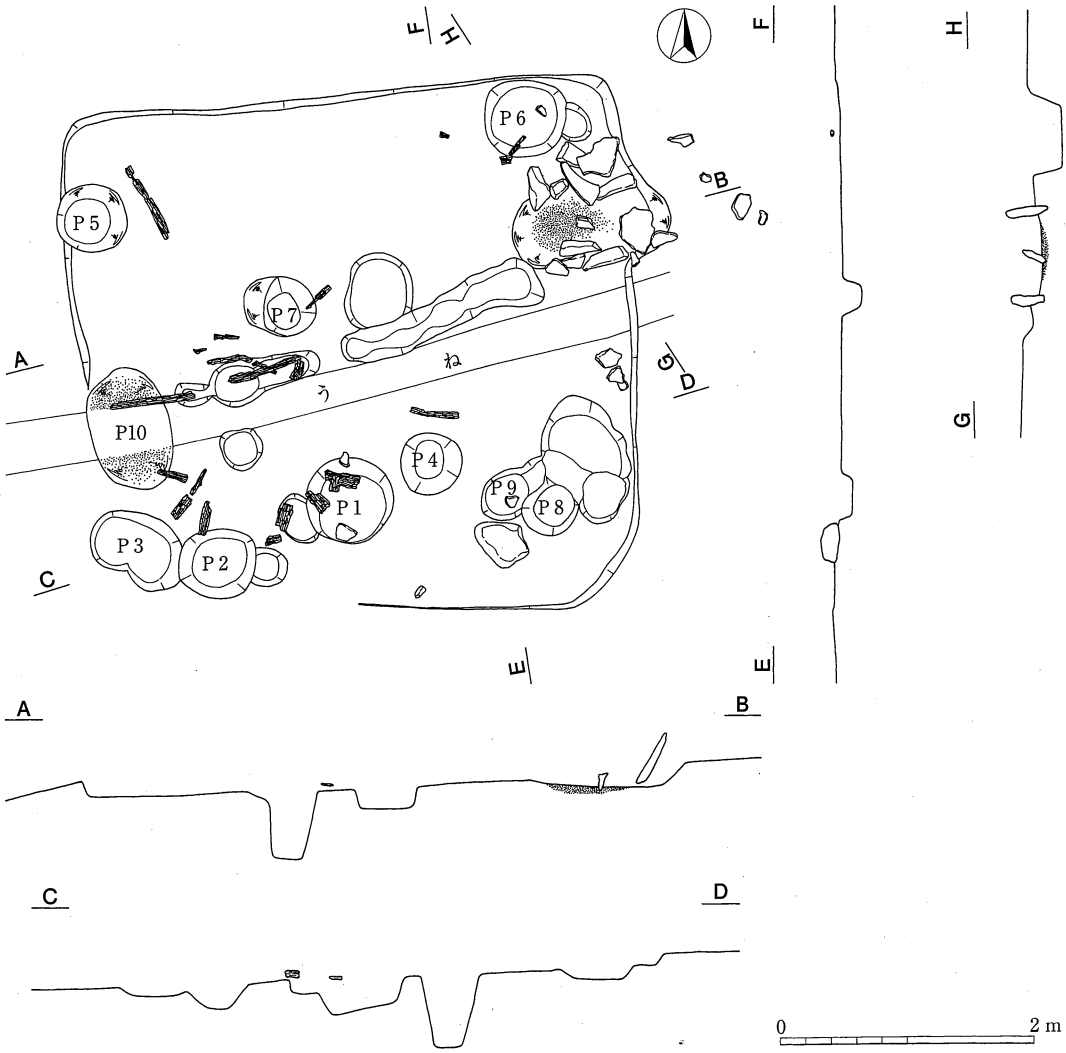
2　平安時代の遺構と遺物

検出調査した平安時代の遺構は第５図、表２に示したように後期の竪穴住居址６軒である。出土した遺物は土師器、灰釉陶器、鉄製品、石製品、炭化種子がある。

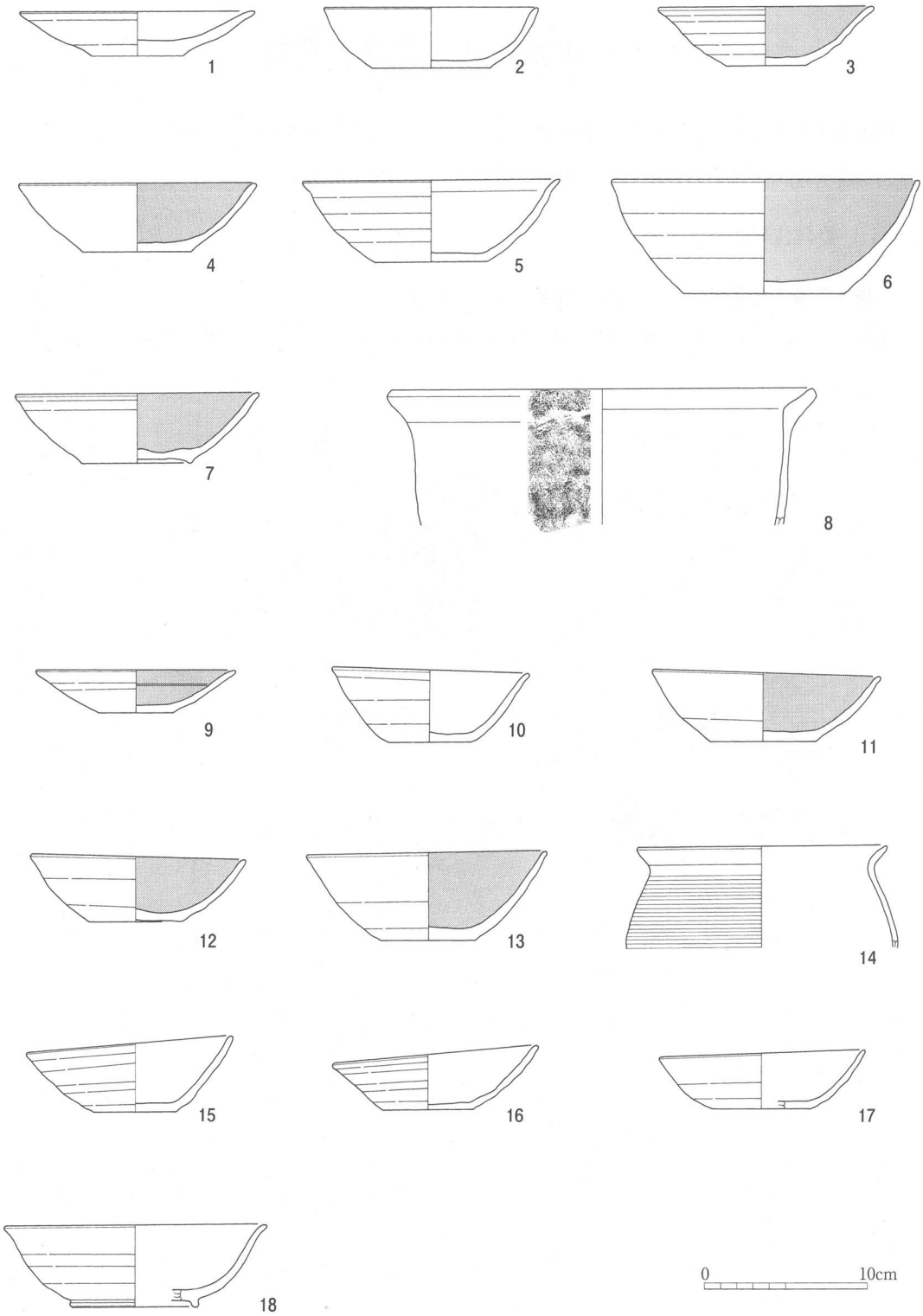
（１）竪穴住居址

第１号竪穴住居址（第５・23・24図、写真４～６）

尾根上のEA－52～54、EB－52～54、EC－52～54の９グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴



第23図　第１号竪穴住居址実測図（１：60）



第24図　第１・２号竪穴住居址出土土器実測図（１：４）

住居址で、中央東西方向には耕作の畝がみられる。畝は深く床面を破壊している。

自然傾斜の東西方向で土層の観察を行った。埋土は３～８cmと薄く詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。なお、埋土中には数多い炭化材と焼土が包含されている。

ローム層中に構築されていた。大きさは長軸450cm、短軸423cmである。壁の立ち上がりは普通で、壁高は東８cm、西3.5cm、南４cm、北２cmといずれも低い。床面はやや西に傾斜し、部分的にタタキ床も認められたが総体的にはあまりよくない。ピットは性格のわかるものは少なく柱穴を特定することはできない。カマド左のＰ１は灰ためであろう。カマドは東壁の北寄りに石組粘土カマドが構築されていたが、埋土が浅いこともあり上部はすでに破壊され、崩れた天井石が付近に散乱していた。平板石を立てた両袖と分炎柱は原形を留めていた。西壁の南寄りで火床と思われる焼土を検出した。耕作の畝で二分されてしまい詳しいことはわからないが、58×98cmと広いものでレンズ状に窪み旧いカマド址と思われる。

出土した遺物は土師器がある。カマド内と周辺およびピット内からの出土である。

土師器はⅢ１点（第24図１）、坏６点（２～７）、甕１点（８）である。３・４・６・７の４点は内面黒色研磨土器、７には高台が付けられているが低いものである。２はＰ５、３はＰ１、８はＰ３、５・６はカマド内、７はカマド左袖出土である。

第２号竪穴住居址（第５・24・25図、写真７～12）

尾根上のEO－56～58、EP－56～58、EQ－56～58の９グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、第１号竪穴住居址の東方で平安時代では一番東からの検出である。耕作の畝による撹乱もみられた。

自然傾斜の東西方向で土層の観察を行い埋土はⅠ～Ⅴに分けた。Ⅰはローム細粒と炭化物を含む黒色土。Ⅱはローム細粒と炭化物を含む黒褐色土。Ⅲもローム細粒と炭化物を含む黒褐色土であるが、Ⅱよりローム細粒が多く褐色が増している。Ⅳはローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土。Ⅴもローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土であるが、Ⅳより焼土が多くなりその違いで分けた。

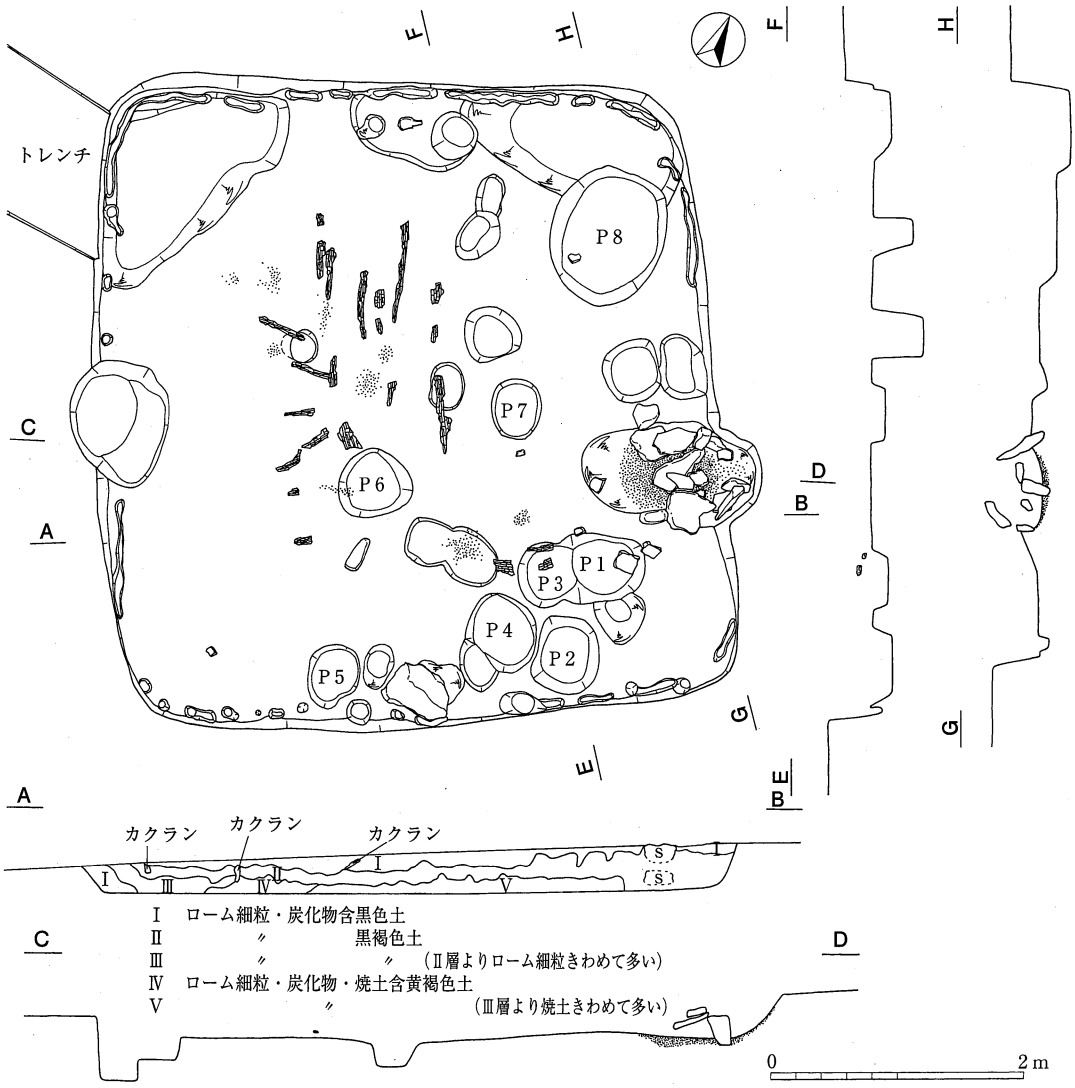
炭化材が放射状に遺存していたが検出状況から屋根材と思われる。

ローム層中に構築されていた。大きさは長軸510cm、短軸488cmである。壁の立ち上がりは普通で、壁高は東22cm、西35cm、南27cm、北16cmである。床面はやや西に傾斜し部分的に硬いタタキ床も認められたが総体的にはあまりよくない。壁直下に周溝が部分的にめぐり小ピットが重なる。周溝の幅は７～10cm、深さは２～10cmと一定しない。小ピットは径10cm前後で深さは７～16cmとやはり一定しない。ピットは性格のわかるものは少なく柱穴を特定することはできない。貼床がみられたものもある。北東隅と北西隅の大きなピットは類似点が多く貯蔵穴であろうか。カマドは東壁南寄りに石組粘土カマドが構築されていたが、埋土が浅いこともあり上部はすでに破壊さ

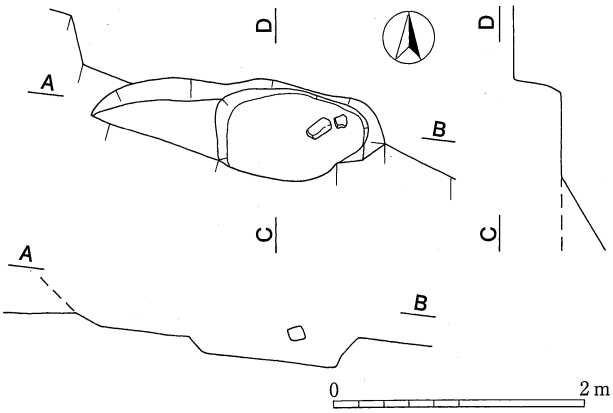
れていた。天井石はカマド内に落込むもの横にずれたものなどがあった。袖石と分炎柱は原形を留めていた。

出土した遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器がある。

土師器は段皿１点（第24図９）、坏４点（10～13）、小形甕１点（14）、須恵器は坏３点（15～17）、灰釉陶器は碗１点（18）である。９・11～13の４点は内面黒色研磨土器、12はＰ１、13はカマド内出土。10の内面には煤状の付着物がみられる。15はＰ３・Ｐ４・Ｐ７、17はＰ１・Ｐ３・Ｐ５出土破片が接合した。16はＰ３出土である。



第25図　第２号竪穴住居址実測図（１：60）



第26図　第４号竪穴住居址実測図（１：60）

第４号竪穴住居址（第５・26図）

南斜面のDR－34、DS－34の２グリッドに跨る隅丸方形と思われる竪穴住居址であるが、昭和51年の村道改良工事ですでに南側の多くは破壊されていた。住居址に認定したが明確なことはわからない。第１号竪穴住居址の南方に位置する。

自然傾斜の南北方向で土層の観察を行った。残存した範囲が少なく詳しいことはわからなかったが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

ローム層中に構築されていたが、残存した範囲は北壁と床面で、(243)×(58) cmの狭い範囲である。壁の立ち上がりは比較的よく高さは28cmを計る。床面は硬いタタキ床でよい。柱穴は検出できなかったが、性格不明のピットは120×(75) cmと大きく深さは11cmと浅く上面から礫２点が出土した。カマドは欠損範囲に構築されていたものと思われ検出できなかった。

出土した遺物は少ないが土師器がある。

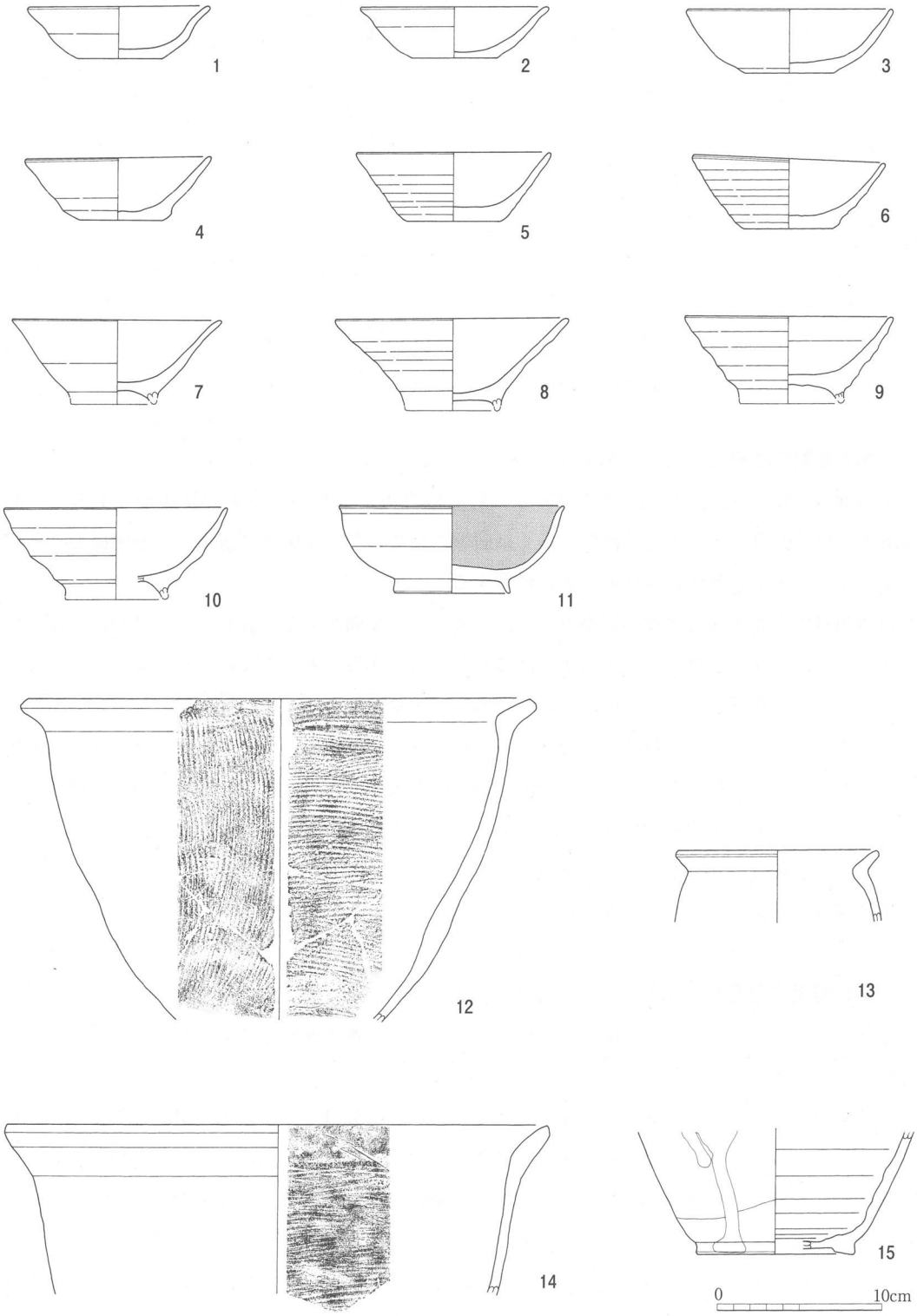
土師器は坏小破片で図示できなかった。

第10号竪穴住居址（第27・28図、写真22～27）

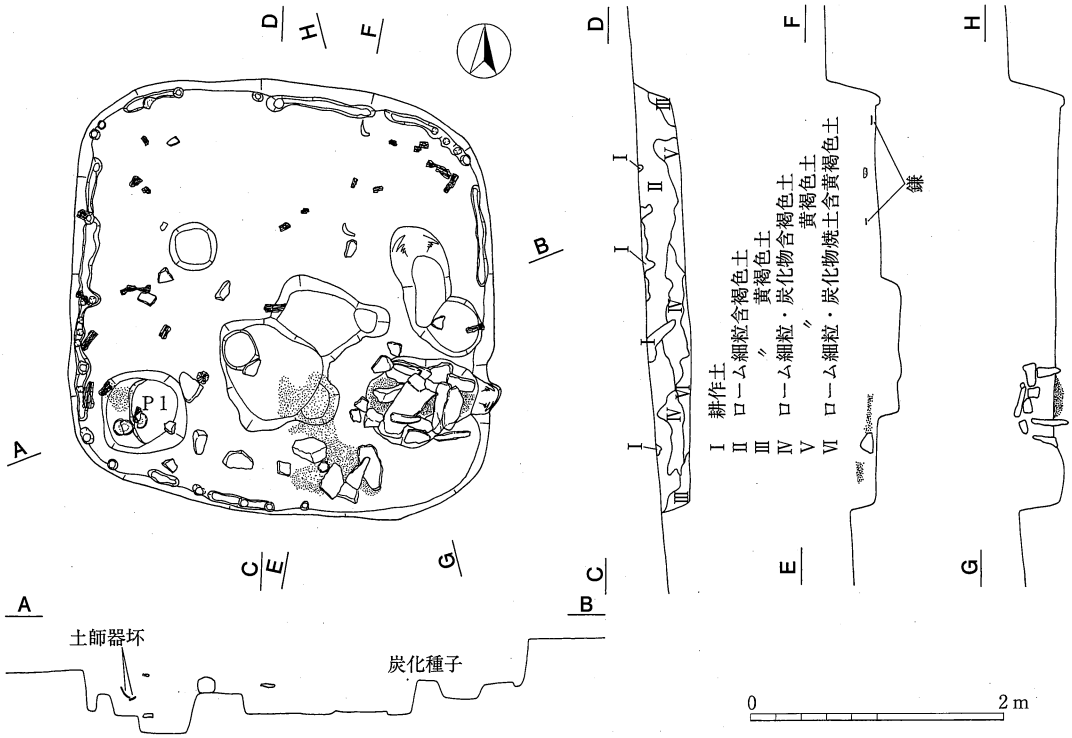
尾根上のCH－45～47、CI－45～47の６グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、第１号竪穴住居址の西方に位置する。

自然傾斜の東西方向で土層の観察を行い埋土はⅠ～Ⅳに分けた。Ⅰは黒褐色土（耕作土）で根による撹乱もみられる。Ⅱはローム細粒を含む褐色土。Ⅲはローム細粒を含む黄褐色土、ローム細粒が多くなることで黄色味が増す。Ⅳはローム細粒・炭化物および焼土を含む黄褐色土であるが、焼土の有無により分けた。

ローム層中に構築されていた。大きさは長軸345cm、短軸335cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で良好である。壁高は東36cm、西29cm、南20cm、北30cmである。床面は中央が僅かに窪んでいるが硬いタタキ床で良好である。壁直下に周溝が部分的にめぐり、小ピットもある。周溝の幅



第27図　第10号竪穴住居址出土土器実測図（1：4）



第28図　第10号竪穴住居址実測図（1：60）

は6～13cm、深さは4～10cmと一定しない。小ピットの径は6～14cm前後で深さは3～14cmでやはり一定しない。ピットは性格のわかるものは少なく柱穴を特定することはできない。貼床がみられたものもある。カマドは東壁南寄りに石組粘土カマドが構築されていた。天井石と袖石ともほぼ原形を留めていた。カマド近くには性格不明の石が散乱していた。

出土した遺物は土師器、灰釉陶器、鉄製品がある。

土師器は坏6点（第27図1～6）、碗5（7～11）、小形甕1点（13）、甕2点（12・14）、灰釉陶器は壺1点（15）である。11は内面黒色研磨土器、3の内・外面には煤状の付着物がみられる。3・12はカマド内出土である。

鉄製品は図示しなかったが鎌1点（写真25）がある。

第11号竪穴住居址（第5・29・30図、写真28～33）

南斜面のBJ－41～42、BK－41～42の9グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、第10号竪穴住居址の西方に位置する。すでに南壁は昭和51年の村道改良工事ですでに破壊されていた。東で小竪穴36、北では小竪穴40～44と重複する。重複による新旧関係は、本址が小竪穴を切って

いることから本址が新しく小竪穴が旧い。小竪穴40～44は検出時の観察では竪穴住居址が重複しているようにみえたが、精査で重複する５基の小竪穴であることを確認したもので、小竪穴番号は整理作業の折りに付けた。

自然傾斜の南北方向で土層の観察を行うが、傾斜が強いため北壁際では厚い堆土も南に行くに従い薄くなる。前記したようにすでに南壁際は道路工事で欠損し詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

残存部分はローム層中に構築されていた。大きさは長軸476cm、短軸（370）cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で良好である。壁高は北が高く南にいくに従い低くなる。ちなみに北は67cm、東は45cm、西は39cmを計る。床面はやや南に傾斜し東壁際には３～５cmの段差がみられるが、硬いタタキ床で良好である。周溝は壁直下にめぐり幅は８～17cm、深さ４～６cmと浅いが周溝内には小ピットが連続し穿たれている。小ピットの径は７～10cm、深さは５～６cmとやはり浅い。ピットは16基検出したが重複するものもみられたが性格は不明である。カマド隣のＰ２は灰だめの穴であろう。カマドは北東隅に石組粘土カマドが構築されていた。天井石はカマド手前に落ち、付近には崩れたと思われる石が散乱していた。原形を留める石もあり煙道部分の平板石は蓋をした状態を示していた。袖石は平板石を埋めたしっかりしたもので遺存状態は良い。カマド内には細い溝がみられ溝より手前の焚き口側の焼土化は著しかったが、奥の煙道側はほとんど焼けていなかった。煙道の立ち上がり部分は焼けボロボロしていた。以上のようにカマド内の焼土化と煙道の状態から、溝には平板状の石が立てられ、カマド内下半には蓋がされた状態が考えられるが、埋め立てられた平板石を検出することはできなかった。

カマド手前で検出した火床と東壁際の床面には段差のみられたことから、建て直しが行われた可能性が高いようである。

出土した遺物は土師器、灰釉陶器、鉄製品がある。

土師器は坏８点（第30図１～８）、碗４点（９～12）、灰釉陶器は碗２点（13・14）である。10と12は内面黒色研磨土器。11の内面にはおこげ状の付着物がみられる。２・３はＰ１、６～８・10・12・13はカマド右袖出土である。

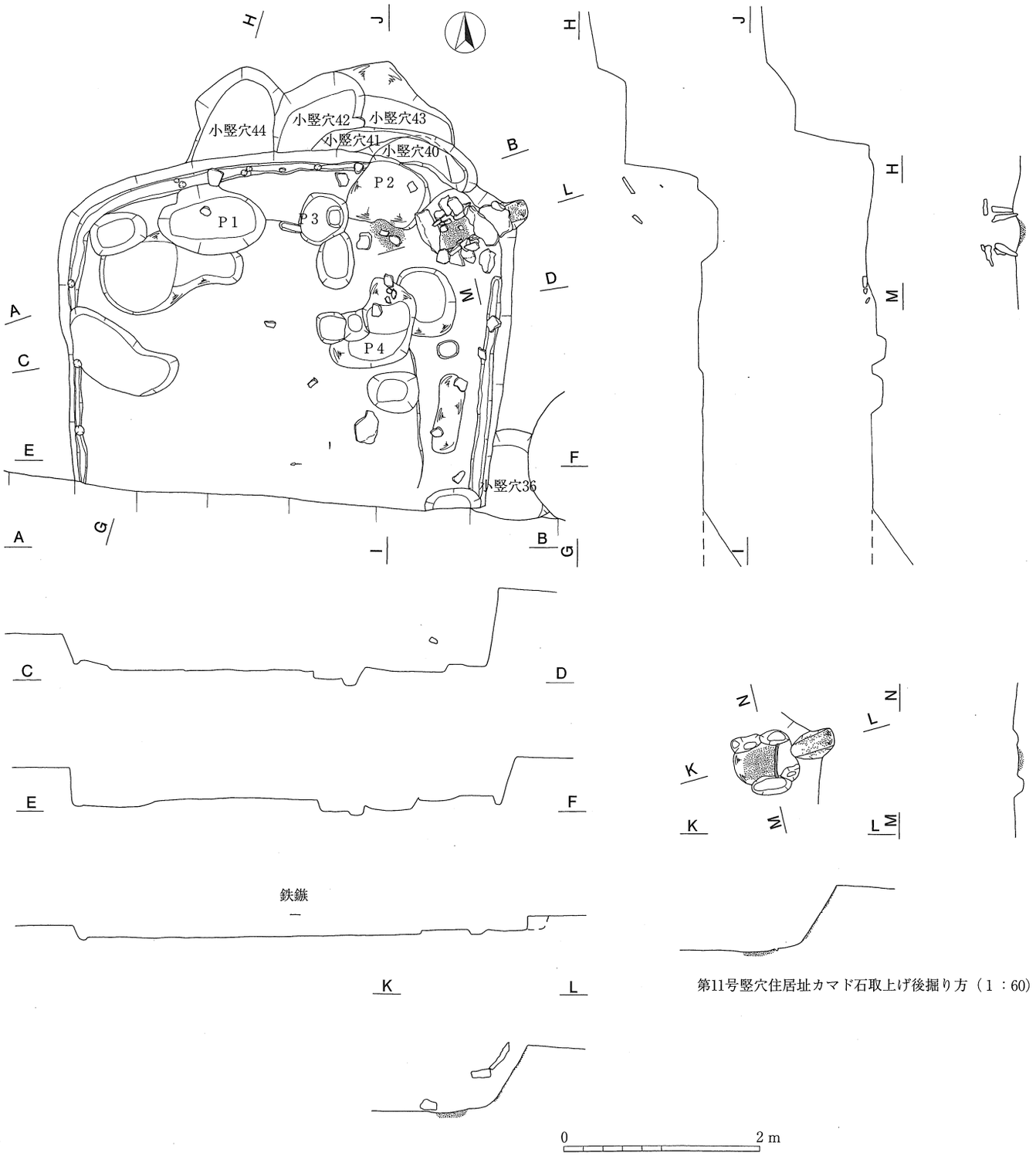
鉄製品は機種不明である。

第12号竪穴住居址（第５・30図、写真34～39）

本址の調査を担当した調査員の不手際で土層図と平面図を紛失してしまい図示してないが、南斜面のBT－42・43、BU－41～43、BV－43の６グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、第10号竪穴住居址の西方に位置する。

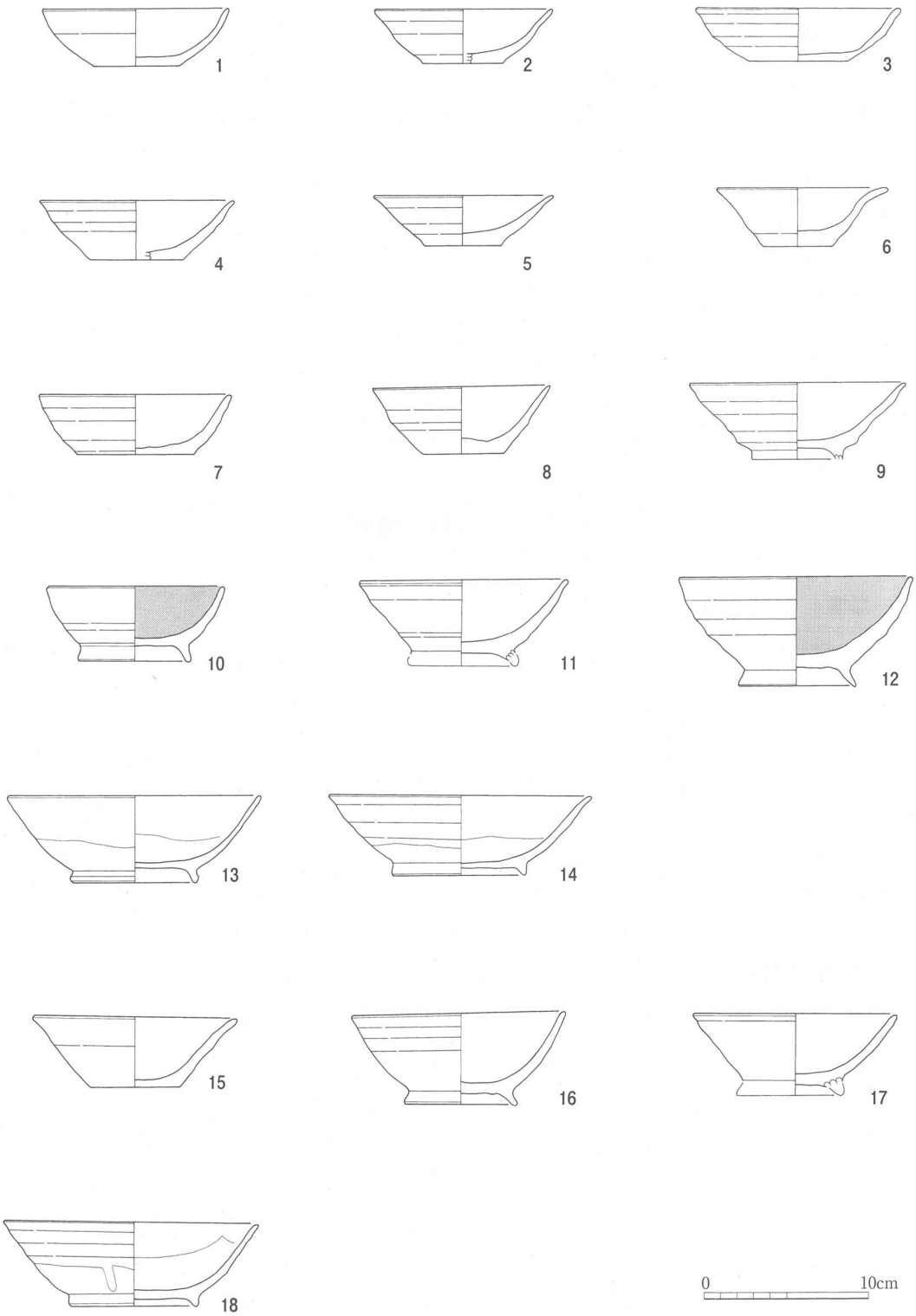
南側は昭和51年の村道改良工事ですでに破壊されていた。土層は自然傾斜の南北方向で観察を行い、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没と考えられるものである。

ローム層中に構築されていた。大きさは長軸（360）cm、短軸（340）cmである。壁の立ち上が



第11号竪穴住居址カマド石取上げ後掘り方（1：60）

第29図　第11号竪穴住居址、小竪穴36・40～44実測図（1：60）



第30図　第11・12号竪穴住居址出土土器実測図（1：4）

りは良好で北壁が高くなる。床面は硬いタタキ床で良好である。ほぼ中央辺りの床面直上からカマド石と思われる比較的大きな石が出土したが、カマドの遺存状態は良好で本址以外のカマド石のようである。壁直下には周溝がめぐっている。ピットは検出したが柱穴に特定できるものはなく性格は不明である。カマドは北壁東寄りに石組粘土カマドが構築されていたが、粘土は火熱のためボロボロであったが破損がみられない完全な状態であった。

出土した遺物は土師器と灰釉陶器がある。

土師器は坏１点（第30図15)、碗２点（16・17)、灰釉陶器は碗１点（18）である。

（２）遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品がある。

土師器、須恵器、灰釉陶器は破片ばかりで図示できなかった。

石製品は砥石４点（第22図６～９）である。６～８の３点は破損している。

3　近世の遺構

墓壙１（第５図）

BM－49グリッドで検出した。検出時点では小竪穴と考えたものである。精査で人骨、寛永通宝等が出土し近世の墓壙であることが明らかになり対象外とした。

V　まとめ

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。しかし、整理期間の都合で遺構・遺物ともに未だ分析に手をつけることができないでいる。発掘調査から整理作業の折々に感じたことを述べまとめとしたい。

縄文時代前期

村内には国史跡阿久遺跡があることで前期の集落址は多いように思われているようであるが、竪穴住居址を検出した遺跡は、阿久遺跡以外では昭和50年度に中央自動車道建設に先立ち調査された大石遺跡、平成５年度に県営圃場整備事業恩膳地区に先立ち調査を実施した恩膳西遺跡だけである。

村内で発掘調査に携わり前期の集落址の発見を期待する気持は大きかったが、長い期間その機会に恵まれることはなかったが、家前尾根遺跡で前期前半期の竪穴住居址を調査した。いずれも尾根南斜面肩部の狭い範囲からの発見であったが、竪穴住居址は畑への取り付け道と昭和50年に実施された村道改良事業ですでにその多くは破壊されてしまい全容を把握できなかったことが残念である。

検出した竪穴住居址は８軒であるが、すでに破壊された範囲の方が多いものばかりで、炉址を確認できたものは少ない。

本遺跡の北には阿久川が、南には菖蒲沢川がある。したがって本遺跡は阿久川の左岸で、菖蒲沢川の右岸にあたる。阿久遺跡は阿久川の右岸であり、大石遺跡は菖蒲沢川の左岸である。本村で確認できた前期の数少ない集落址が、阿久川と菖蒲沢川の川筋であることを注目してもよさそうである。標高は本遺跡が970m前後、阿久遺跡が900m 前後、大石遺跡が930m前後である。本遺跡が一番高所になるがその違いは70mほどである。当地方の中期の集落址は標高1,000mを越すものもある。遺跡間は直線距離で阿久遺跡は約２㎞、大石遺跡は約1㎞でそれほど離れていない。恩膳西遺跡は本遺跡の北方向約1.5㎞にあり、半径１㎞位の範囲に前期前半期の遺跡群が形成されているようである。

まとめることはできなかったが、縄文時代前期前半期の集落址発見は当地方における該期研究の好資料になるものと思っている。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった皆さまに厚く御礼申し上げる次第である。

表３　小竪穴10出土黒曜石一覧表

取上番号	長さcm	幅　cm	厚さcm	重さｇ	名　称	備　　考
1	3.6	2.9	1.6	11.7	原石	
2	3.6	2.6	0.4	5.2	〃	
3	2.9	2.5	2.1	16.6	〃	
4	3.3	2.4	1.9	9.8	〃	
5					石鏃	
6	3.4	1.5	0.9	4.6	原石	
7	3.1	3.0	1.6	13.2	〃	
8	1.4	1.2	0.9	1.3	〃	
9	3.9	2.4	1.9	20.0	〃	
10	3.6	2.6	1.2	13.6	〃	
11	3.1	0.7	0.6	0.9	〃	
12	3.6	2.8	2.0	15.0	〃	
13	1.4	1.6	0.5	0.2	〃	
14	2.4	1.6	0.5	2.7	〃	
15	2.8	2.6	1.1	4.8	〃	
16－1	5.3	2.3	1.4	16.6	〃	接合　取上げ後の破損？
16－2	1.1	0.9	0.2	0.2		
17	5.8	1.8	1.1	14.3	〃	
18	6.5	1.5	1.4	11.9	〃	
19	5.6	1.9	1.7	15.7	〃	
20	2.9	1.2	0.6	2.5	〃	
21	1.8	0.8	0.5	0.6	〃	
22	3.2	2.5	2.2	14.1	〃	
23	4.1	1.2	1.0	6.6	〃	
24	4.0	1.9	1.6	11.6	〃	
25	7.0	2.0	1.3	12.9	〃	
26	4.2	2.0	1.0	6.6	〃	
27	3.2	1.6	0.7	4.4	〃	
28	3.4	3.4	1.3	11.4	〃	
29	4.4	2.5	1.2	9.0	〃	
30	2.5	2.2	1.7	6.0	〃	
31	2.5	1.3	0.2	0.8	〃	
32	3.8	3.5	1.7	24.2	〃	
33	1.8	1.3	1.0	2.0	〃	
34	4.2	2.3	0.9	8.8	〃	
35	3.4	2.0	0.9	5.8	〃	
36	3.1	2.1	1.4	8.3	〃	
37	4.7	2.0	0.9	8.0	〃	
38	3.7	2.2	0.8	3.3	〃	
39	3.2	2.3	1.2	7.4	〃	
40－1	2.1	1.7	1.5	3.6	〃	
40－2	1.3	0.8	0.5	0.2	〃	
41						欠番
42	4.0	2.0	1.2	12.6	原石	
43	3.3	2.1	0.8	6.4	〃	

取上番号	長さcm	幅　cm	厚さcm	重さｇ	名　称	備　　考
44	4.2	2.0	1.3	10.8	〃	
45	2.5	1.2	0.4	1.0	〃	
46	3.5	1.9	0.7	6.3	〃	
47	3.6	2.9	1.4	9.3	〃	
48	3.3	2.2	0.9	7.9	〃	
49	6.1	1.9	0.9	7.9	〃	
50	4.1	1.9	0.9	8.0	〃	
51	3.3	2.1	1.4	9.3	〃	
52	3.0	2.4	0.9	7.0	〃	
53	4.1	2.7	1.1	13.9	〃	
54	4.2	1.9	1.5	11.6	〃	
55	3.7	2.2	1.2	9.0	〃	
56	2.8	2.1	1.9	11.8	〃	
57	2.8	2.3	1.4	8.1	〃	
58	2.9	2.3	1.0	5.6	〃	
59	3.4	1.7	0.4	3.5	〃	
60	3.4	2.7	1.4	13.1	〃	
61	5.7	2.1	1.4	13.6	〃	
62	4.1	2.7	1.9	17.0	〃	
63	2.8	2.2	0.8	5.3	〃	
64	3.6	3.0	2.3	21.9	〃	
65	4.2	2.0	1.4	8.6	〃	
66	3.4	2.3	1.2	11.7	〃	
67	4.3	1.7	1.3	8.2	〃	
68	5.5	2.1	1.7	20.8	〃	
69	3.8	2.5	1.6	13.6	〃	
70	4.1	3.4	1.6	17.2	〃	
71	3.7	1.9	1.1	16.5	〃	
72	3.0	2.7	1.0	8.9	〃	
73	2.9	2.3	0.9	6.2	〃	
74	3.0	2.3	1.3	9.2	〃	
75	4.3	2.9	2.0	19.2	〃	
76	3.2	2.9	1.9	17.3	〃	
77	3.4	3.0	1.5	12.9	〃	
78	3.7	1.9	1.1	6.7	〃	
79	3.5	1.9	1.1	7.8	〃	
80	4.3	1.9	1.1	9.5	〃	
81	4.6	2.5	1.1	8.6	〃	
82	3.9	2.3	0.9	7.2	〃	
83	3.7	2.1	0.9	6.1	〃	
84	3.2	2.3	1.0	7.8	〃	
85	3.3	2.2	1.5	13.4	〃	
86	3.5	2.6	1.6	13.5	〃	
87	4.0	1.5	1.2	7.2	原石	
88	4.3	2.3	1.1	12.3	〃	
89	5.3	3.6	1.3	15.2	〃	
90	3.7	1.9	1.3	10.7	〃	

取上番号	長さcm	幅　cm	厚さcm	重さg	名　称	備　　考
91						欠番
92	5.6	2.0	0.4	7.2	原石	
93	1.3	1.2	0.8	1.5	〃	
94	5.8	2.3	1.6	16.3	〃	
95	6.4	2.6	2.2	31.5	〃	
96	4.2	2.0	1.5	12.6	〃	
97－1	3.9	2.9	1.7	14.5	〃	
97－2	4.2	1.9	1.2	7.1	〃	
98	4.0	2.3	1.5	11.2	〃	
99	4.3	2.2	1.5	13.8	〃	
100	5.2	3.7	1.8	30.1	〃	
101	2.9	2.4	2.3	10.5	〃	
102	3.6	3.4	1.3	16.7	〃	
103	3.3	2.9	1.7	11.3	〃	
104	3.5	2.8	1.9	10.7	〃	
105						欠番
106	4.2	2.1	0.9	8.7	原石	
107	3.4	2.2	2.0	16.8	〃	
108	4.0	1.9	1.3	9.3	〃	
109	3.5	1.7	0.9	6.7	〃	
110	4.0	2.5	1.1	9.9	〃	
111	3.3	3.0	0.9	10.5	〃	
112	3.5	2.3	1.1	9.1	〃	
113	2.2	1.7	0.7	1.5	〃	
114	3.4	3.0	1.7	14.9	〃	
115－1	3.0	2.7	1.6	8.2	〃	
115－2	1.4	0.9	0.8	0.8	〃	
116	3.0	2.4	1.2	9.8	〃	
117	5.3	1.9	1.3	11.1	〃	
118	3.7	2.4	1.5	10.7	〃	
119	3.9	2.0	1.4	8.4	〃	
120	3.1	1.9	1.2	6.6	〃	
121	2.8	1.5	0.7	1.8	〃	
122	3.7	2.7	1.6	16.1	〃	
123	4.0	1.9	1.2	5.4	〃	
124	2.7	2.2	0.8	3.7	〃	
125	3.4	2.4	2.0	14.1	〃	
126	1.5	1.4	0.2	0.3	〃	
127	3.3	1.6	0.6	3.0	〃	

表3　遺構一覧表

竪穴住居址　縄文時代前期

カッコ付けの数値は推定値を示す

番号	図版	検出位置	平面形	規模 長軸	規模 短軸	規模 深さ	遺構の特徴・出土遺物等
6	第6図	ＤＯ－40 ＤＰ－40 ほか	円形	(242)	(137)	20	南側半分程は自然流失、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、周溝、柱穴、土器口縁部破片１点、黒曜石剥片１点
7	第7図	ＤＱ－39 ＤＲ－39 ほか	隅丸方形	348	(172)	40	南側半分程は自然流失、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、周溝、柱穴、炉址は欠損部、土器破片点16点、石鏃１点、黒曜石剥片３点
8	第8図	ＤＶ－37 ＤＷ－36 ほか	楕円形	(300)	330	70	古い農道で南側の一部を欠損、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、第16号竪穴住居址と重複本址が新、埋土はレンズ状の自然埋没、周溝、ピット、地床炉、土器破片３点
9	第10図	ＥＮ－36 ＥＯ－36 ほか	不整円形 ないしは 楕円形	(238)	(133)	53	昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、柱穴、貯蔵穴、地床炉、床面に据えた礫、土器破片２点、黒曜石剥片１点
13	第11図	ＤＭ－39 ＤＮ－39 ほか	隅丸方形	290	(77)	32	古い農道で南側の半分以上を欠損、小竪穴37と重複新旧関係は不明、土器破片２点、黒曜石剥片１点、平安時代土師器・灰釉陶器小破片
14	第12図	ＤＱ－37 ＤＲ－37 ほか	円形	(192)	(52)	50	古い農道で南側の半分以上を欠損、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、柱穴、土器破片４点、黒曜石剥片１点
15	第13図	ＤＳ－37 ＤＴ－37 ほか	円形	(161)	(81)	35	古い農道で南側の半分以上を欠損、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、柱穴、遺物は皆無で時代不詳、検出位置から時期は考えた
16	第8図	ＤＶ－36 ＤＷ－36 ほか	円形 ないしは 楕円形	250	(128)	(12)	古い農道で南側半分程を欠損、第８号竪穴住居址と重複本址が旧い、柱穴、炉址は欠損部、遺物は皆無

縄文時代中期

番号	図版	検出位置	平面形	規模 長軸	規模 短軸	規模 深さ	遺構の特徴・出土遺物等
3	第14図	ＥＨ－66 ＥＩ－66 ほか	楕円形	407	347	7	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、小竪穴と重複新旧関係は不明、周溝、入り口の施設、柱穴、土器埋設石囲炉、炉体土器１点、凹石２点
5	第15図	ＤＯ－35 ＤＰ－35 ほか	円形	(270)	(125)	57	昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、礫２点、炭化材、広範囲に焼土、土器破片７点、黒曜石剥片12点

平安時代

番号	図版	検出位置	平面形	規模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第23図	ＥＡ－52 ＥＢ－52 ほか	隅丸方形	450	423	8	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、ピット、東壁に石組粘土カマド、旧カマド火床、土師器皿１点、坏６点、甕１点
2	第25図	ＥＯ－56 ＥＰ－56 ほか	隅丸方形	510	488	35	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、炭化材、周溝、ピット、貯蔵穴、東壁に石組粘土カマド、土師器段皿１点、坏４点、小形甕１点、須恵器坏３点、灰釉陶器碗１点
4	第26図	ＤＲ－34 ＤＳ－34	隅丸方形	(243)	(58)	28	昭和51年村道改良工事で半分以上破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、ピット、土師器坏小破片
10	第28図	ＣＨ－45 ＣＩ－45 ほか	隅丸方形	345	335	36	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、周溝、ピット、東壁に石組粘土カマド、土師器坏６点、碗５点、小形甕１点、甕２点、灰釉陶器壺１点、鉄製鎌１点
11	第29図	ＢＪ－41 ＢＫ－41 ほか	隅丸方形	476	(370)	67	昭和51年村道改良工事で一部破壊、小竪穴36・40～44と重複本址が新、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、周溝、ピット、北東隅に石組粘土カマド、建て直し？、土師器坏８点、碗４点、灰釉陶器碗２点、不明鉄製品
12		ＢＴ－42 ＢＵ－41 ほか	隅丸方形	(360)	(340)		昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、北壁に石組粘土カマド、土師器坏１点、碗２点、灰釉陶器碗１点

小竪穴

番号	図版	検出位置	平面形	規模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第14図	ＥＫ－67	楕円形	120	73	17	遺物は皆無で時代不詳
2	第16図	ＥＦ－67 ほか	楕円形	104	89	13	縄文土器底部破片１点
3	第16図	ＥＪ－50 ほか	不整円形	76	70	29	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
4	第16図	ＤＮ－52	長楕円形	109	72	14	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
5	第16図	ＤＬ－56 ほか	不整円形	110	100	33	検出面から埋土中のほぼ同レベルに礫４点、礫の周りには薄い焼土と炭化物、縄文土器底部破片３点
6	第16図	ＤＫ－55	楕円形	98	(70)	21	遺物は皆無で時代不詳
7	第16図	ＤＶ－46	楕円形	133	93	29	遺物は皆無で時代不詳
8	第16図	ＤＳ－44 ほか	楕円形	101	65	28	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳

番号	図版	検出位置	平面形	規模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
9	第16図	ＣＯ－49 ほか	不整円形	168	167	30	埋土はロームブロックを含むレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
10	第17図	ＤＮ－72 ほか	不整円形	151	151	29	縄文時代後期堀之内期の同一個体土器破片９点、石鏃１点、黒曜石剥片127点
11	第16図	ＥＵ－38 ほか	楕円形	(125)	(95)	46	道路法面すでに破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
12 13	第18図	ＥＡ－35 ほか	楕円形	(150)	(120)	48	小竪穴12と小竪穴13が重複、13が新しく12が旧い、昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
14	第18図	ＥＢ－35 ほか	不整円形	100	97	45	昭和51年村道改良工事で一部破壊、遺物は皆無で時代不詳
15	第18図	ＥＢ－35 ほか	円形	75	75	(72)	昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、南壁の一部は袋状の貯蔵穴、底面はほぼ平で底壁際に小穴が８基、遺物は皆無で時代不詳
16	第16図	ＤＸ－37 ほか	長楕円形	96	62	29	埋土は黒褐色土単層、遺物は皆無で時代不詳
17	第16図	ＤＯ－67 ほか	不整円形	100	94	19	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
18	第18図	ＤＸ－40 ほか	円形	104	100	36	上面には集石、平安時代の須恵器甕破片１点
19	第10図	ＥＭ－36 ほか	楕円形	139	94	30	昭和51年村道改良工事で一部破壊、埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
20	第18図	ＤＦ－53 ほか	不整楕円形	109	84	22	遺物は皆無で時代不詳
21	第19図	ＣＪ－58 ほか	長楕円形	380	132	120	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、陥し穴、底面に小穴６基、遺物は皆無で時代不詳
22	第18図	ＢＩ－52 ほか	楕円形	82	63	12	遺物は皆無で時代不詳
23	第18図	ＢＤ－50 ほか	楕円形	118	102	33	検出面に板状の小礫２点、遺物は皆無で時代不詳
24	第18図	ＤＧ－61	楕円形	90	82	14	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
25	第18図	ＤＧ－62 ほか	不整楕円形	131	126	30	埋土は黒褐色土単層、底面近くに焼土、遺物は皆無で時代不詳
26	第18図	ＤＧ－63 ほか	不整楕円形	99	78	24	埋土は黒褐色土単層の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
27	第18図	ＤＡ－61 ほか	楕円形	127	90	26	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
28	第19図	ＣＪ－44 ほか	楕円形	115	95	29	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳

番号	図版	検出位置	平面形	規模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
29	第19図	ＣＧ－44 ほか	不整円形	121	120	26	埋土は黒褐色土単層、遺物は皆無で時代不詳
30	第19図	ＤＰ－41 ほか	不整楕円形	118	82	31	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
31	第19図	ＢＮ－57 ほか	不整円形	108	104	33	埋土は黒褐色土単層の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
32	第19図	ＢＤ－42	楕円形	131	110	48	埋土はザラザラロームの包含多く、人為的埋没？、遺物は皆無で時代不詳
33	第８図	ＤＵ－38	楕円形	100	87	40	埋土はロームブロックを多量に包含、人為的埋没？、遺物は皆無で時代不詳
34	第19図	ＤＯ－72	不整円形	62	58	31	埋土はレンズ状堆積の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
35	第19図	ＤＯ－39	楕円形	78	(59)	14	南側農道で欠損、埋土は黒褐色土単層、遺物は皆無で時代不詳
36	第29図	ＢＬ－40 ほか	円形	(94)	(69)	35	炭焼きの穴と昭和51年村道改良工事で一部破壊、第11号竪穴住居址と重複本址が旧、埋土は黒褐色土単層の自然埋没、遺物は皆無で時代不詳
37	第11図	ＤＮ－40 ほか	不整円形	212	(185)	117	第13号竪穴住居址と重複本址が旧、ロームマウンド？、遺物は皆無で時代不詳
38	第19図	ＢＫ－48 ほか	楕円形	74	64	27	第11号竪穴住居址と重複本址が旧、握り拳から人頭大の礫８点、人為的埋没？、遺物は皆無で時代不詳
39	第19図	ＢＨ－47 ほか	不整楕円形	133	81	27	平板状の礫２点と人頭大の礫２点、人為的埋没？、遺物は皆無で時代不詳
40	第29図	ＢＬ－42	楕円形	(158)	(31)	18	第11号竪穴住居址と重複本址が旧、小竪穴41・43と重複新旧不明、遺物は皆無で時代不詳
41	第29図	ＢＫ－42 ほか	楕円形	(121)	(24)	50	第11号竪穴住居址と重複本址が旧、小竪穴40・42・43と重複新旧不明、遺物は皆無で時代不詳
42	第29図	ＢＫ－42	不整楕円形	(98)	(71)	43	第11号竪穴住居址と重複本址が旧、小竪穴41・43・44と重複新旧不明、遺物は皆無で時代不詳
43	第29図	ＢＫ－42 ほか	不整楕円形	(91)	(82)	31	小竪穴40～42と重複新旧不明、遺物は皆無で時代不詳
44	第29図	ＢＪ－42 ほか	楕円形	(93)	(91)	29	第11号竪穴住居址と重複本址が旧、小竪穴42と重複新旧不明、遺物は皆無で時代不詳

写真１　遺跡遠景（西から）

写真２　遺跡遠景（南から）

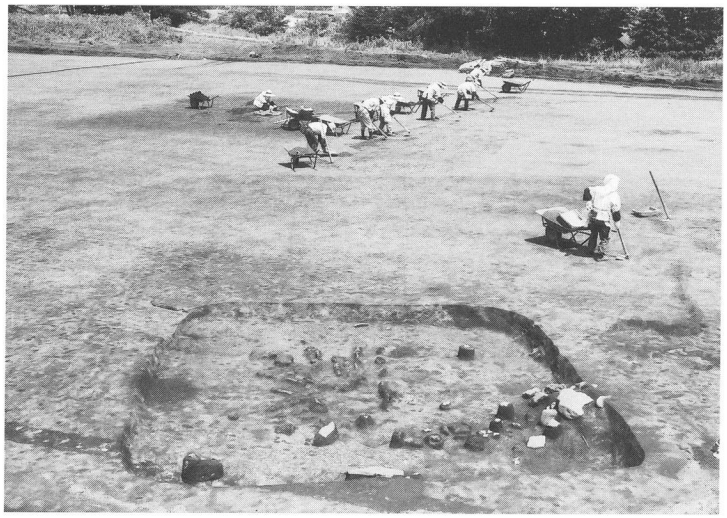


写真３　第２号竪穴住居址と発掘風景（南東から）

写真図版 2

写真 4　第 1 号竪穴住居址
検出状態（西から）

写真 5　第 1 号竪穴住居址
全景（西から）

写真 6　第 1 号竪穴住居址
カマド（西から）

写真 7　第 2 号竪穴住居址
検出状態（西から）

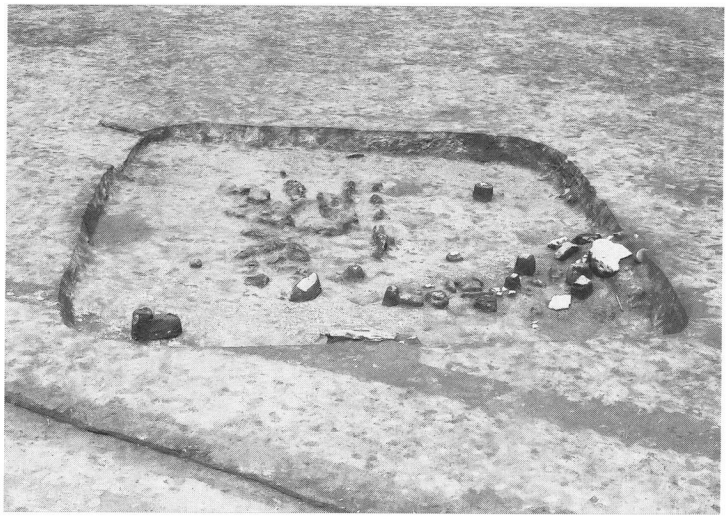


写真 8　第 2 号竪穴住居址
炭化材出土状態そ
の 1（南東から）

写真 9　第 2 号竪穴住居址
炭化材出土状態そ
の 2（南西から）

写真図版 4

写真10　第２号竪穴住居址
全景（西から）

写真11　第２号竪穴住居址
カマドその１（西
から）

写真12　第２号竪穴住居址
カマドその２（西
から）

写真13　第３号竪穴住居址検出状態（南から）

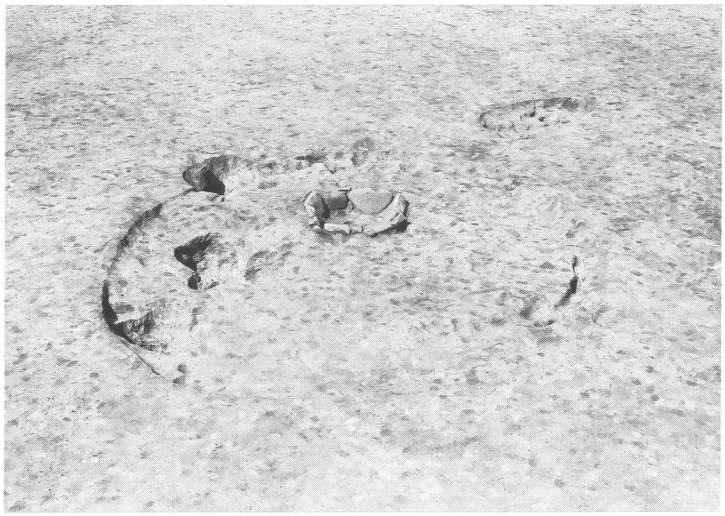


写真14　第３号竪穴住居址全景（南から）

写真15　第３号竪穴住居址土器埋設石囲炉（南から）

写真図版 6

写真16　第３号竪穴住居址土器埋設石囲炉土器取上げ後（南から）

写真17　第５号竪穴住居址全景（南から）

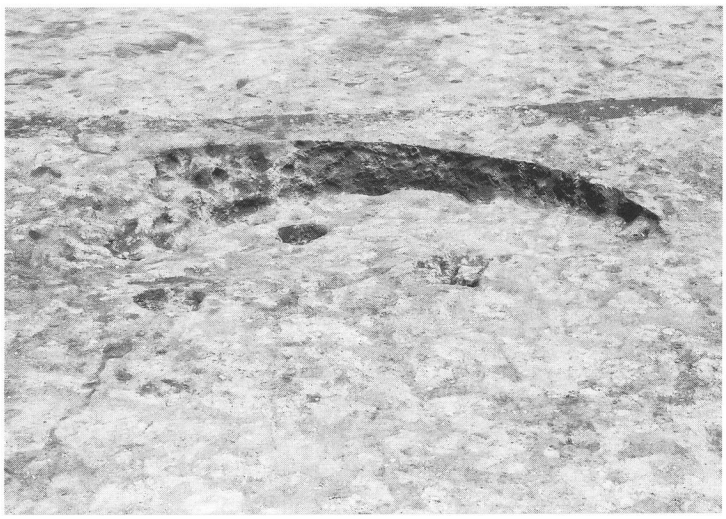


写真18　第６号竪穴住居址全景（南から）

写真19　第７号竪穴住居址
全景（南から）

写真20　第８号竪穴住居址
全景（南から）

写真21　第９号竪穴住居址
全景（南から）

写真図版 8

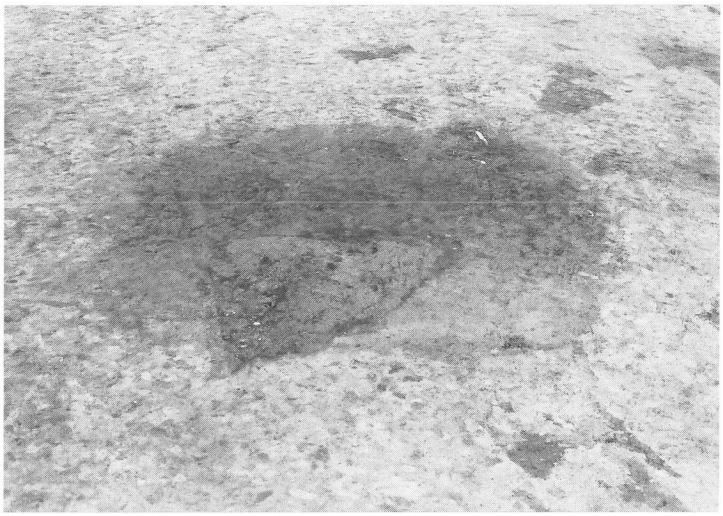


写真22　第10号竪穴住居址
検出状態（西から）

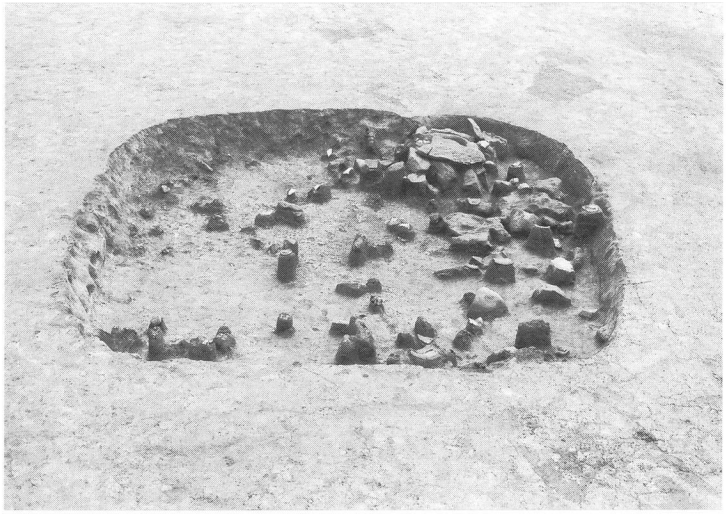


写真23　第10号竪穴住居址
遺物出土状態（西
から）

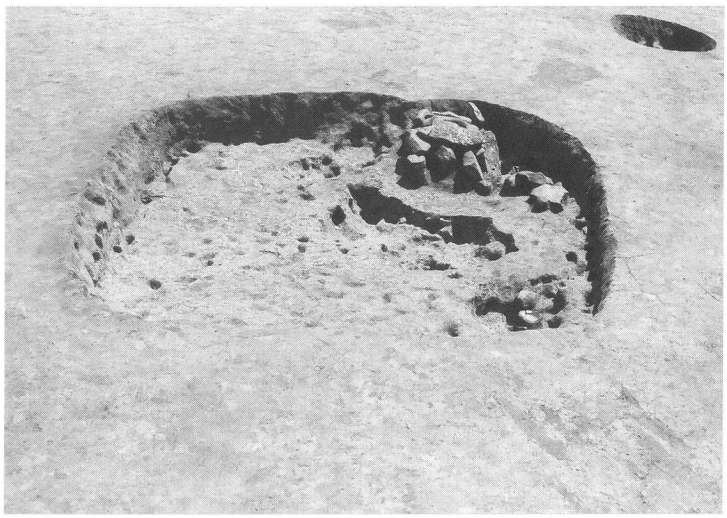


写真24　第10号竪穴住居址
全景（西から）

写真25　第10号竪穴住居址鎌出土状態（西から）

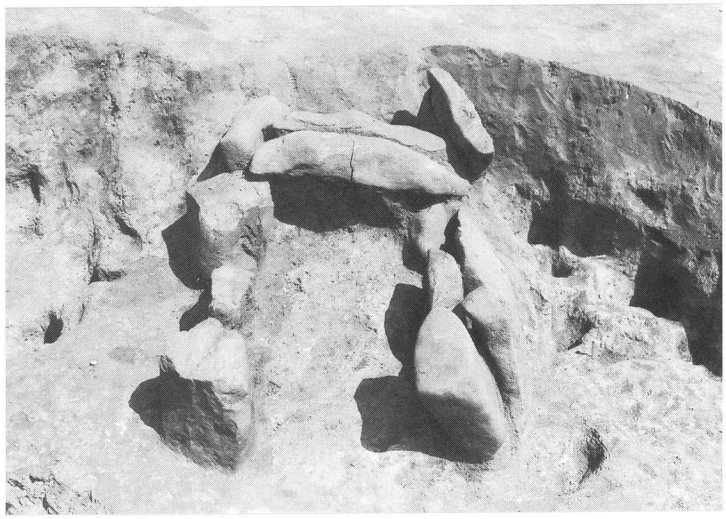


写真26　第10号竪穴住居址カマドその１（西から）

写真27　第10号竪穴住居址カマドその２（北から）

写真28　第11号竪穴住居址検出状態（北東から）

写真29　第11号竪穴住居址遺物出土状態（南から）

写真30　第11号竪穴住居址全景（南から）

写真31　第11号竪穴住居址カマドその１（南西から）

写真32　第11号竪穴住居址カマドその２（南から）

写真33　第11号竪穴住居址カマドその３（南東から）

写真図版12

写真34　第12号竪穴住居址
検出状態（東から）

写真35　第12号竪穴住居址
遺物出土状態（南
から）

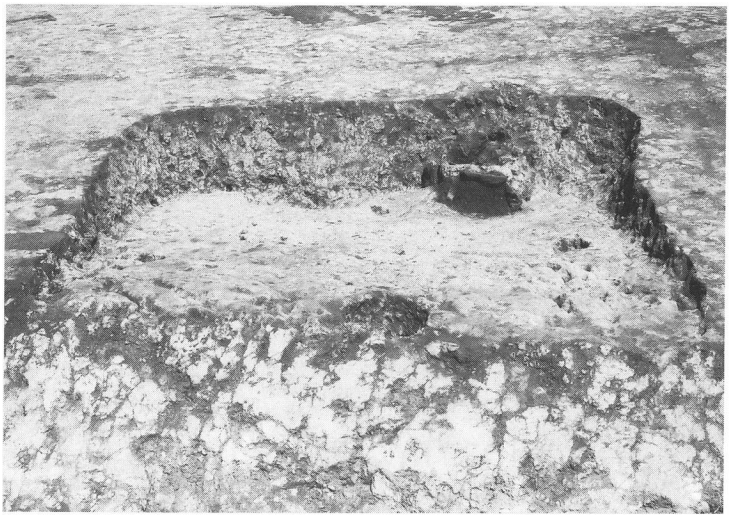


写真36　第12号竪穴住居址
全景（南から）

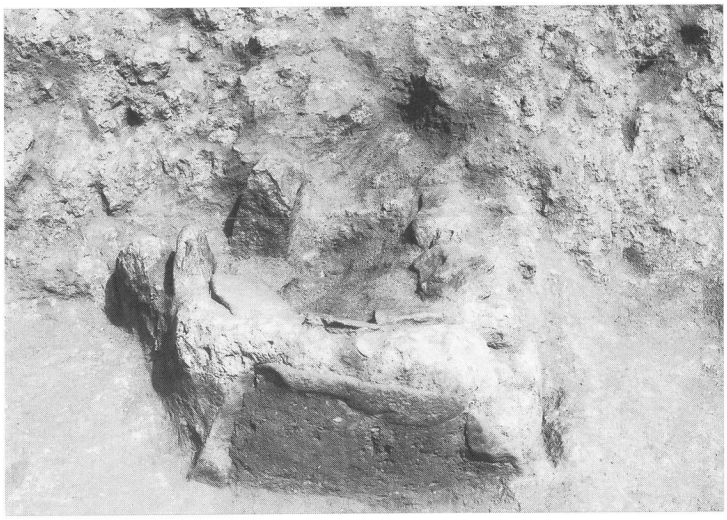


写真37　第12号竪穴住居址カマドその１（南から）

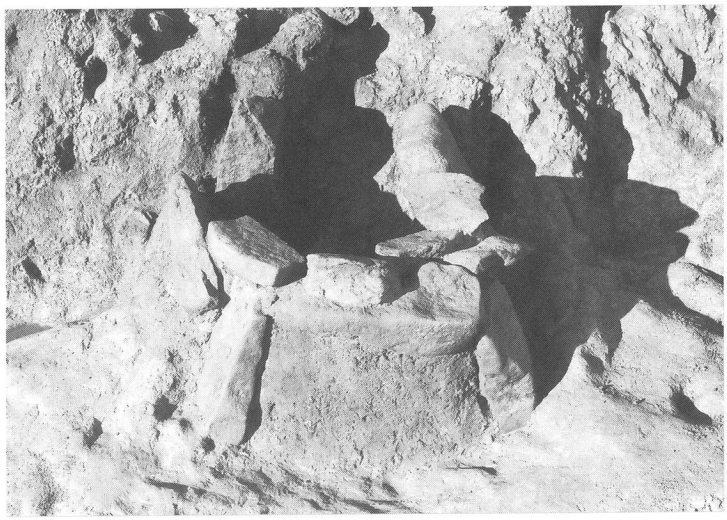


写真38　第12号竪穴住居址カマドその２（南から）

写真39　第12号竪穴住居址カマドその３（南から）

写真図版14

写真40　第13号竪穴住居址
全景（南から）

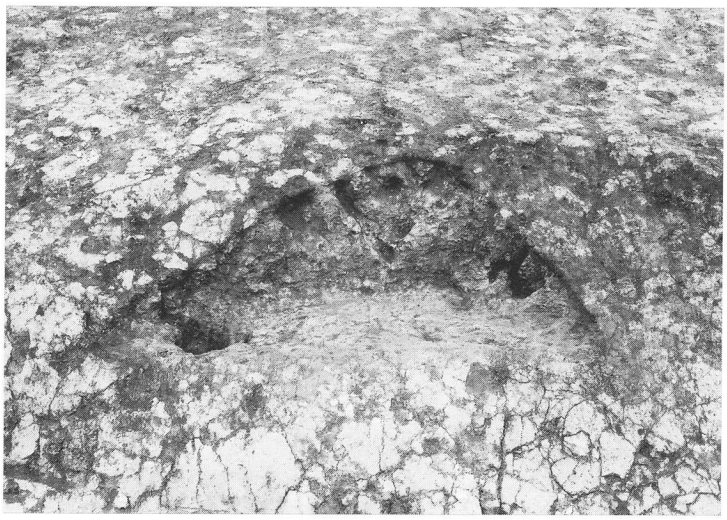


写真41　第14号竪穴住居址
全景（南から）

写真42　第15号竪穴住居址
全景（南から）

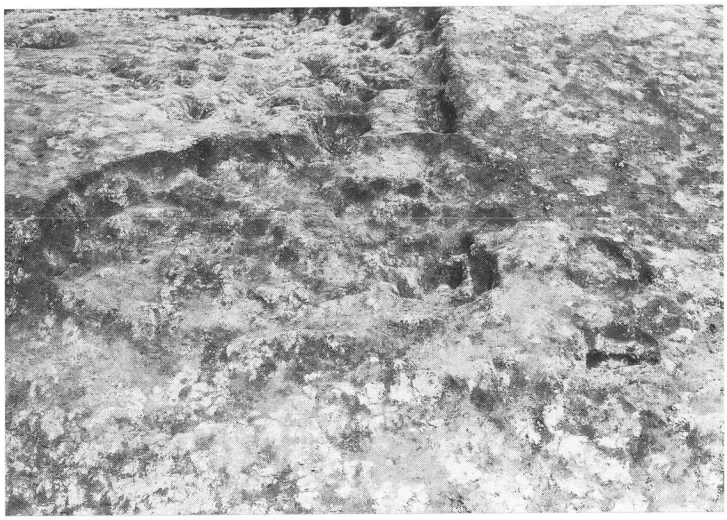


写真43　第16号竪穴住居址全景（南から）

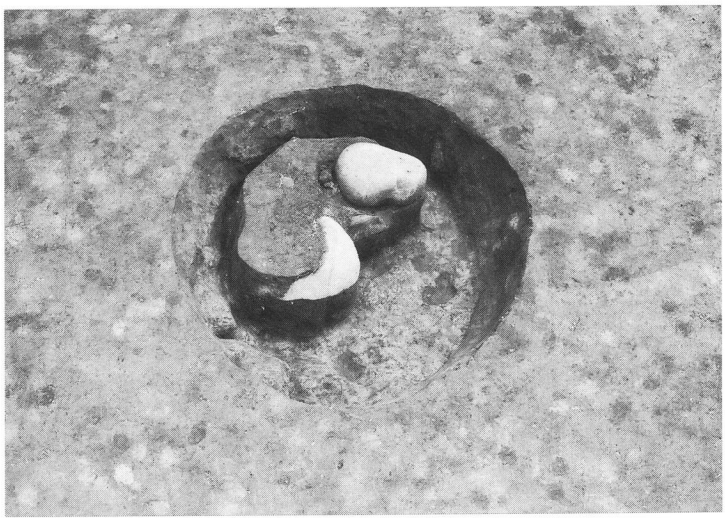


写真44　小竪穴５礫出土状態（南から）

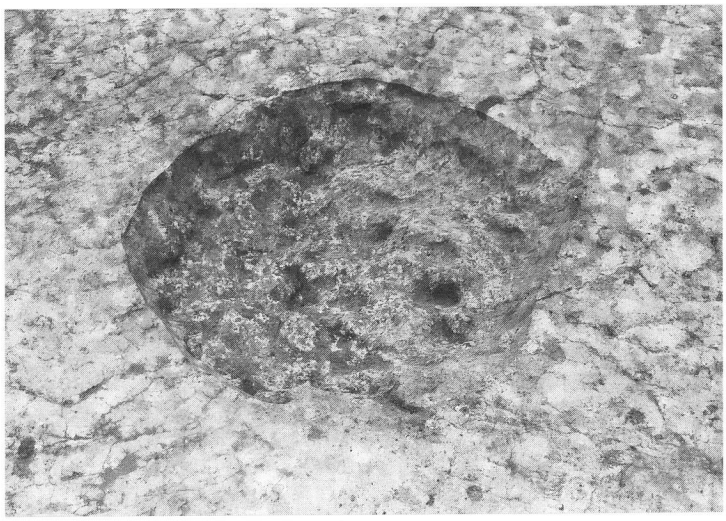


写真45　小竪穴９全景（南から）

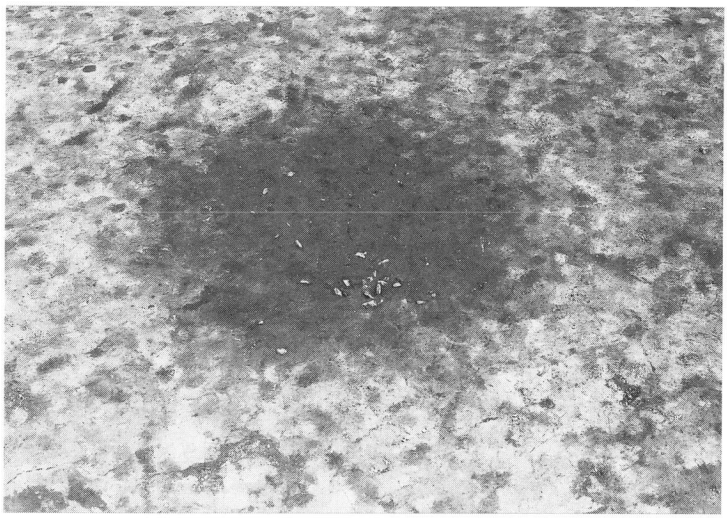


写真46　小竪穴10検出状態（南から）

写真47　小竪穴10黒曜石出土状態その１（西から）

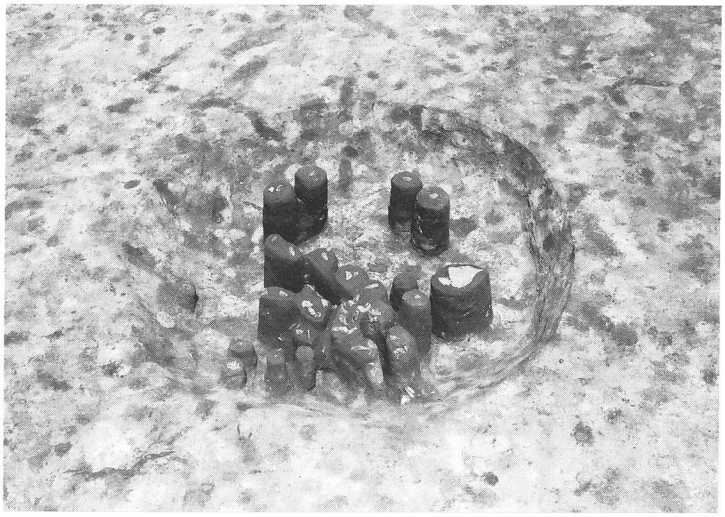


写真48　小竪穴10黒曜石出土状態その２（南から）

写真49　小竪穴10黒曜石出土状態その３（南から）

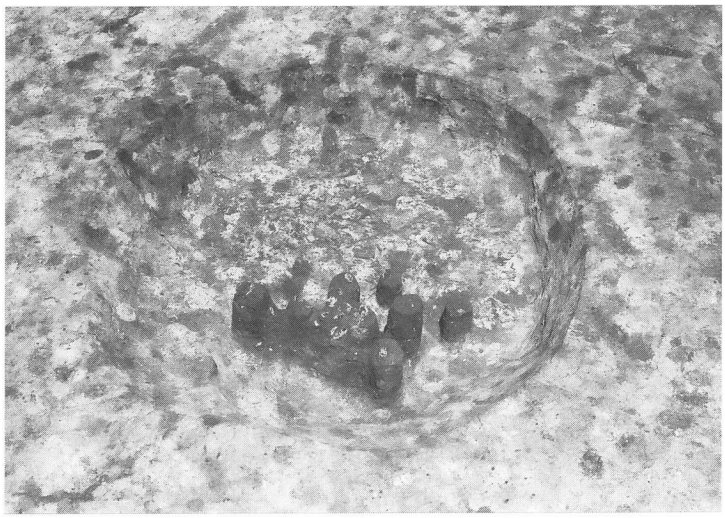


写真50　小竪穴10黒曜石出土状態その４（南から）

写真51　小竪穴10全景（南から）

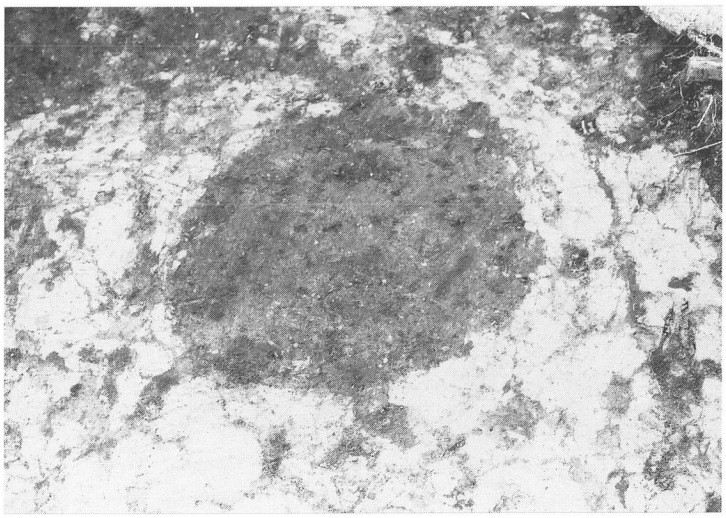


写真52　小竪穴15検出状態（北から）

写真53　小竪穴15土層（東から）

写真54　小竪穴18検出状態（南から）

写真55　小竪穴18礫出土状態その１（東から）

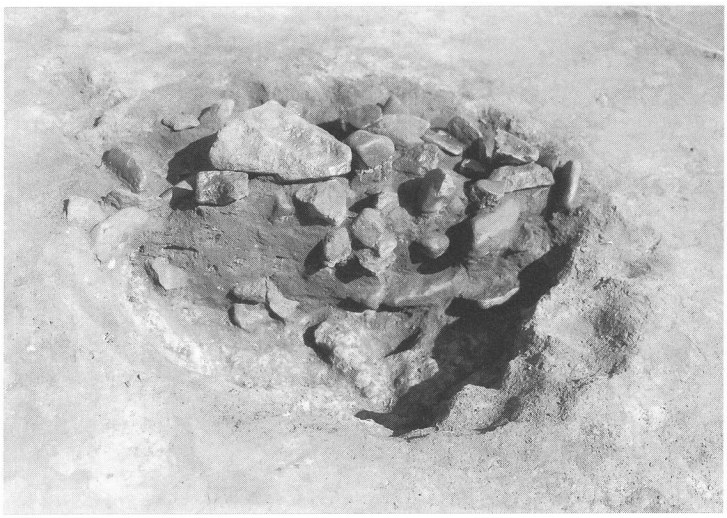


写真56　小竪穴18礫出土状態その２
断面・土層（東から）

写真57　小竪穴18全景（南から）

写真図版20

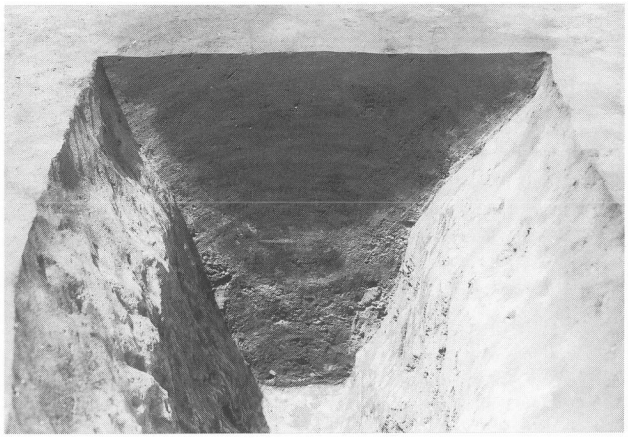


写真58　小竪穴21土層

写真59　小竪穴21全景（南から）

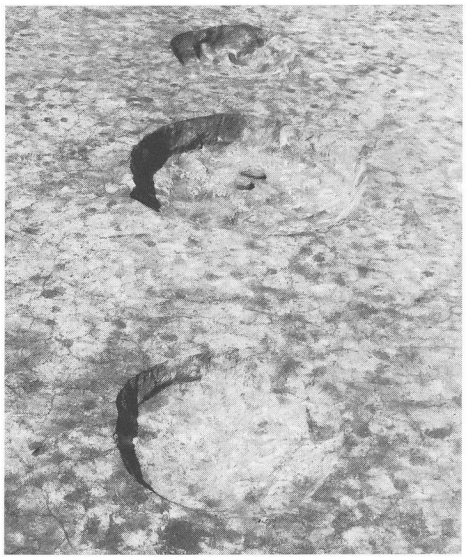


写真60　小竪穴24～26全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	いえまえおねいせき
書名	家前尾根遺跡
副書名	平成７年度　県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	38
編著者名	平出　一治
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-01　長野県諏訪郡原村6549番地１　　TEL　0266-79-2111
発行年月日	西暦　1996年03月

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
家前尾根（いえまえおね）	長野県諏訪郡原村室内（ながのけんすわぐんはらむらむろうち）	3637	56	35度57分26秒	138度12分41秒	19950501～19950929	13,800.0	平成７年度県営圃場整備事業原村西部地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家前尾根	集落跡	縄文時代 前期 中期	竪穴住居址　８軒 竪穴住居址　２軒 小竪穴　44基 （時期不詳を含む）	縄文時代 土器、石器	縄文前期の竪穴住居址は、欠損した範囲は多く詳細は不明であるが、当地方には少ない該期の集落研究上の好資料になろう
		平安時代 後期	竪穴住居址　６軒	平安時代 土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石製品	
		近世	墓壙　１基 （対象外）	人骨、寛永通宝等	

原村の埋蔵文化財38

家　前　尾　根　遺　跡

平成７年度　県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日　平成８年３月

発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所　日本ハイコム株式会社